

シンポジウム①

主体的な学びを支える仕組み

シンポジスト

濱名 篤 (学校法人濱名学院 理事長・関西国際大学 学長)

荒瀬 克己 (京都市教育委員会 教育企画監)

福田 直史 (高知工科大学 総務部長)

コーディネーター

高橋 伸一 (京都精華大学 人文学部 教授 共通教育センター長)

<シンポジウム①>

主体的な学びを支える仕組み

参 加 人 数 479 名

シンポジスト

第 1 報 告 者 濱名 篤 (学校法人濱名学院 理事長・関西国際大学 学長)

第 2 報 告 者 荒瀬 克己 (京都市教育委員会 教育企画監)

第 3 報 告 者 福田 直史 (高知工科大学 総務部長)

コーディネーター 高橋 伸一 (京都精華大学 人文学部 教授 共通教育センター長)

高橋 改めまして皆様こんにちは。本日はお寒い中、また年度末でお忙しいところFDフォーラムへご参集いただき誠にありがとうございます。それでは第1シンポジウムを開催させていただきます。私はこのシンポジウムのコーディネーター役と本日の司会進行を務めさせていただきます、京都精華大学の高橋です。よろしくお願ひいたします。

まずは私の方から10分間ほどお時間を頂いてこのシンポジウムの趣旨と進行の説明、ならびに参加者の皆さんとの簡単なアイスブレイクを行わせていただきます。今回のFDフォーラムの全体のテーマ並びにシンポジウムのテーマは、共に、「主体的」という言葉と「学ぶ」という言葉をキーワードとして含んでおります。この2つのタイトルをあわせますと、「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには、主体的な学びを支える仕組みが大切である。」という認識になります。今回のシンポジウムでは、主体的な学びに対する認識、あるいは実践的な仕組みへの視点の獲得ということをFD的な要素として組み込みました。

今回のシンポジウムのテーマは昨年8月に中教審から発表されました答申、いわゆる「質的転換答申」を強く念頭に入れております。あの答申につきましては「学修時間の確保」、「能動的な学修(アクティブラーニング)」等、幾つかの注目される論点がありクローズアップされてきました。また、解釈も様々になされてきたと思います。」

このシンポジウムを構成するにあたってコーディネーターとして私自身重要だと思う4つの点を企画のベースとさせていただきました。

まず第1点目は「主体的な学びの確立」あるいは「主体的に考える力の育成」という教育的目的と課題の重要性については大学関係者に広く認識されており、特に異論はないという点。

第2点目は、この教育的な目的と課題については、高等教育界だけではなく初等・中等教育関係者にとってもその重要性が認識されており、同様に重要な教育

的課題である点。

3点目は、しかしこの教育的課題を細かく解析した場合、個々のファクターにアプローチする理論は存在するが、全体的に機能し統括する大きな理論的枠組みがないという点。

そして最後の4点目は、ということは、この教育的課題については極力偶然的なアプローチあるいは勘違いを排して、より良い試行錯誤や実践的活動を通じて、主体的に私たち教育関係者が解決していくことが求められていること。特にそのリーダーシップを取ることが高等教育界に大きく期待されていること。この4つの点をベースにシンポジウムを企画させていただきました。

シンポジウム第1部では3名のシンポジストをお招きしており報告発表をお聞きしていただきます。ここで高いところから大変恐縮なのですが、3名のシンポジストの方々をご紹介させていただきます。正面に向かって右側の前列に座っておられます。誠に恐縮ですが紹介の時にお顔をフロアの皆さんの方にお向けていただけるとありがとうございます。またフロアの皆さんには拍手でもってどうぞお迎え下さい。

まず最初のご発表は、「主体的な学び」に関する課題解決に向け、具体的な教育実践を視野に入れた包括的な理論的枠組みを、中教審のメンバーであり今回の答申にも深く関わられました、関西国際大学学長の濱名篤先生からお話していただきます。濱名先生よろしくお願いいたします。次に「主体的な学び」のテーマが高等教育から初等教育まで、教育全体の縦軸をイメージできるように中等教育の視点から、現京都教育委員会教育企画監であり元堀川高校校長として「堀川高校の奇跡」の原動力になられました荒瀬克己先生からお話をいただきます。荒瀬先生よろしくお願いいたします。最後に、日本の大学においてこの教育的課題について最も上手く仕組みを作り上げている大学のひとつである高知工科大学から福田直史総務部長をお招きして、高知工科大学のハード面とソフト面のバランスの良い学習

支援環境の仕組みをご紹介して頂くことになっています。
福田部長よろしくお願ひします。

続きましてシンポジウムの進行の説明に入らせていただきます。シンポジウムは1部と2部の構成になっておりまして、1部ではシンポジストの方々のお話を聞いていただきます。その後30分間の休憩を挟みます。その間にシンポジストのご発表に対するご質問とご意見をお受けいたします。お手元の資料に、質問票が3枚入っていると思いますがその1枚をお使い下さい。休憩時間に書いてもらった質問票に関しましてはスタッフが回収させていただきます。

回収したシートに関しては、第2部の「ディスカッション①」でそれぞれの質問に対してシンポジストの方々にお答えしていただきますので、皆さまご協力の方、よろしくお願ひいたします。そして、「ディスカッション②」は、4時10分から5時まで50分間設けていますが、そこではシンポジウムの発表とディスカッション①の質疑応答を受けた形で一旦フロアの皆さんにバトンを渡し、4～5名のグループになって頂いてグループトークをして頂こうと考えております。それまで聞いてきたお話の中で思うことや考えることが必ずあると思います。それをそこでお話を聞いて頂いて、1つの質問や意見にまとめていただきたいと思います。その質問や意見を回収していただき、ディスカッション②ではそれをベースにしながら質疑応答をしていきたいと思っています。第2部の後半では、皆様のご協力がキーになりますが、何卒よろしくお願ひいたします。

大人数なので細かい仕掛けはできないのですが、聞くだけではなく自ら関わり話すというアクティブな行為から1人では考えつかない質問や意見が出てくると面白いかな、と思っています。

それではまず第2部向けたウォーミングアップとして、簡単なアイスブレイクを行わせてもらいます。隣の人、なるべく知らない人と2人、あるいは3人組んで頂いてご所属とお名前、そしてFDフォーラムに何故参加したのか、あるいはシンポジウムで何を得たいかと思っているのかを、1人1分間程度でお話の方をお伝え下さい。約3分間ほど取ります。1分ごとに私の方から時間のお伝えいたします。それではご協力をお願いいたします。それではアイスブレイクということで周りの方と2、3人で結構ですのでお話し下さい。

(3分経過)

3分間経ちました。ご協力ありがとうございました。これでアイスブレイクを終わらせていただきます。これを機に後ほどのフロアトークの際にお話を活発にして頂け

ればと思います。

それではシンポジストの方々のご発表の方に移らせていただきます。最初は「ハイ・インパクト・プラクティスの導入から始まる学びのイノベーション」と題して濱名篤先生の方からご発表の方をいただきます。濱名先生、よろしくお願ひいたします。

濱名 皆さんこんにちは。ご紹介に預かりました濱名でございます。持ち時間30分ということでスタートちょっと遅れていますね。よろしくお付き合いいただきたいと思います。私が使いましたハイ・インパクト・プラクティスというのは皆様方にはあまり聞きなれない言葉だと思います。これは今のアメリカの大学関係者であれば殆ど誰でも知っているといつてもいい教育方法です。どのようにしてこの方法を導入していくのかということが課題となっています。こういう方法から主体的な学びを作っていく。あるいは学びのイノベーションを行っていく必要がある。これは小中等教育ではこういう学びのイノベーションという言葉を使うのですけれども、高等教育にも学びのイノベーションがあつてもいいのではないかということでございます。私はですね、学生が主体的に学ぶ力を持つにはという副題をつけていますが、主体的な学びというのはなかなか奥深いものがありまして、こうすれば必ず主体的な学びができるというのは難しいのではないのかと、ただそれを作るインフラをどう考えていくかについて、お話をさせていただきたいと思います。話の構成はですね、これは皆様方も私どもが、荒瀬先生も参画されていましたが中教審で議論をしていくプロセスでいろんなデータが出てくる。これは明らかに一時代前の中教審と変わってきていまして、実は皆様方どのぐらいご覧になられているか分かりませんが議事録が全部アップされていますので、荒瀬が何を言ったか、濱名が何を言ったかが逐一出てきますので、大胆な荒瀬先生は議事録をチェックしないままそのままだそうですが、私は言い間違えたところを直したりして余計な手間がかかっているのですが、それと同時に資料も全部出ていますのでそれも合わせてご覧になられればと思います。その中に一時代前と何が変わっているかというとデータをきちっと使って議論するようになっております。そのデータからの話とそれから答申から改革に対して私どもが議論の中から、何をしていけば答申の方向性を実現することができるのかと。それと、私が最近非常にこだわっております学習成果。これは質保証といえば学習成果と。このあたりの問題を取り上げていきたいと思っています。まずこれは耳の痛いやつです

ね。これを出されて機嫌のよくなる大学関係者は誰もいない。大学の成果に関する、これは東大の4万人調査の結果でこれまでの授業経験と自分の実力という学生の評価ですね。これを見ていきますと授業経験が役立っていないというのが一番多いのは上の専門知識ですね。専門知識は聞いた知識は役に立っているというのが大体6割ぐらいから多くて7割程度入っているのですが、社会から期待されるジェネリックスキル論理的に文章が書ける、コミュニケーション、外国語というような汎用的に大卒者に求められるようなことが役に立っていないのが同じぐらいの7割ぐらいです。こちらもよりジェネリックになっていきますけれども分析的批判的に考える力、このあたりも推して知るべし。問題を見つけ解決方法を考える力、幅広い知識、ものの見方、社会から期待されているのはこっちも多いのですがこれも更に多いのですがあまり役に立っていない。自分の実力はというと見て頂くと、このあたりは不十分と答えている。専門知識も役には立っているけど力が付いていない。残念ながらこれが全国の大学に対する学生の評価というふうになっているわけです。それでもう1つの大きな問題は学習時間。学習時間というのは非常にトリッキーな設問で、少なくとも、全国学長調査というのを審議の最中に行われまして、満足度、学長と学部長、学習時間において授業の出席。すごいです、ほぼ一致していますね。これは9割以上が今の学生は授業に出ている。ところが授業外の学習では、これも一致していまして4分の3は不十分だと答えている。授業には出るけれども教室外では学習していない。中教審の見立て通りの結果になっていたわけです。こういう話をしますとよく出る話が自虐的な話で、うちの大学は第1志望で入ってきた子は少ないし、高校までの基礎学力も低いからしょうがないのだという話がでますね。これからはこういう印象論は排していくかないといけない。やはりきちんと見ていくと必ずしもそうではないと出てくるわけですね。これは別のデータがあるのですが、これは東大の4万人調査に戻っていますが、これを見ていきますとこれが学校なのですが、これが入学時の偏差値、これが学習時間、授業に関する学習時間とそれに関係ない時間を足したデータでご覧になられた方おられるかもしれません。見ていただきますと、偏差値が一番多いのはこのC大学は偏差値が高くないけれども学習はしている。R大学はですね偏差値は高いけども学習はしていない。ですから偏差値が高い入学時の学力が高かった子が自然に学習するというわけではないというインプリケーションになるわけですね。つまり大学の環境や仕組みとか指導のやり

方によって学生たちの学習の時間が変わってくるということですね。次に、これは授業ですね。今日のように大人数のイベントをしますと立命館大学のように大きな大学でこういう場所はいいなと思うのですが、通常の授業で大人数授業は今や批判される対象になるわけですね。ところが大人数授業が相変わらず多いのかというと今の専任教員の1コマあたりのもちコマなのですね。これは国公私立、分野ごとに分かれているのですが、今は大体週8コマが相場になっている。ただし同時に100人以上の授業がどの形態でも、私立の理系の方が若干多いのですが、殆どで週に1回あるかないかなのです。つまり大人数授業だから細やかな指導や双方向的な授業ができるとは社会が理解してもらえる状態ではない。ということなのです。つまりやり方によっては双方向的な授業が可能な状況にきているわけです。ところが多くの場合、ここに来ておられる先生方もそうだと思うのですが大学教員というのは普通は自分の専門分野に誇りとこだわりを持っている。悪くすれば蛸壺型と批判されるのですがこれは放っておくとそうなっているというのがこのデータからも分かるのです。これは私大校の私学高等研究所で、私どものプロジェクトの結果なのですが、全国学科長調査をやりました。学科の教育目標、学習目標の内容を聞いてきました。上方を見てもらいますと殆ど専門分野特有の知識、専門分野特有の考え方、専門分野特有の技能、技術。こういうのが7割から8割以上の学科の目標の中に入ってくるわけです。そして社会から見た時によく言われるジェネリックな能力といるのはこのあたりですが、それよりは低い5割前後になります。ところが共通教育とか教養教育の目標であったこのあたりの項目は非常に少なくなっている。人格的な成長もいまや半分以下になってきておりまして、専門重視がどんどん進んでいます。ところが実際には学育プログラムという言葉が今回の答申にも出てきます。学育プログラムとは何か、これにはいろいろな考え方があります。要するに学位に対するプログラム、124単位ワンパッケージとして学育プログラムを考える。先生たちはこう考えていますが学生たちにとっては共通教養教育が役30単位ぐらいですね。全国平均でいくと。124分の30ということになりますと4分の1ぐらいは学生から見ればその授業のウエイトがあるのですが殆どその辺が視野に入らないという傾向があるということあります。他方大学にとっての課題を、学長調査の結果なのですが、これを見る一時代昔はアルバイトや部活が原因で学習に集中できない。確かにあるのですね。ですが自ら考える習慣が

不足している、基礎学力が不足している、学習に対する意欲が不足している。というようなことが上位を占めているわけですね。これを一言で言えば入学までの準備不足の学生を自ら入れているということで、逆にいうと準備不足でも大学に入れざるを得ない状況にきていることになるのかと思います。それで現状を考えればどういうことか。学生にしてみれば学習成果は学んで身についている社会的通用性に疑問を持っている。教室内で学習しても教室内の学びでは不十分だと。教員にとって教育のウエイトは拡大していくて 8 コマ平均に全国平均が来ているわけですけども大人数講義も少數になってきているので、努力すればできるかもしれないけどもティーチングロード全体が非常に微妙な状況にある。コマ数は増えている。ユニットは小さく。そういう形になるのかもしれません。更に教員の意識は専門重視で学育プログラムというものの考え方、理念としての 124 単位はワンパッケージという考え方とはかなり乖離した状況になってきている。尚且つ入学時から準備不足の学生を入れているというのが 4 分の 3 の大学でそういう認識を持っているわけですからそれに対する対応ができるのか。このあたりが我々が解決していく主体的な学びを考えていく前の現状分析になるのかもわかりません。それでわれわれもいろいろと調べていくとこういった課題は最近になって浮上したのかというと、どうもそうではない。いろいろ見ると OECD の 1974 年教育使節団の報告書の中にも出てきているのですがロナウド・ドーアさんがこんなことを書いています。当時はピラミッド構造。富士山を八ヶ岳にというように永井道雄さんが文部大臣になった時に一極型ピラミッドは問題だと言ったのですがそんな時にこんなことを書かれていたのですね。ピラミッド構造は日本の私立大学のその下の方の大学ならば、金を払えば静かな暴れないチンパンジーさえも入れると。じつはこういう時代にこんな話が出ていたのですね。しかしながら、これは上智大学の中興の祖であるヨゼフ・ピタウという学長、上智が非常に飛躍時の学長ですが、実は私が入学した時の学長で、卒業する時に学長を辞められたのですがこの人はこういうことを言っていますね。頭の良い学生ばかりではなくて平凡な学生が大学に入れるのは少しも悪いことではない。むしろ相当数の学生は頭が良かろうが悪かろうがいたした努力もなく成長もなく目標もなく漠然と大学を通り抜けることの方が悪い。これは本当の大学の恥で犯罪だと。つまり考えてみると多様な学生が入ってきている 70 年代から。80 年代ぐらいから既に大学自体の教育の質に対して疑問を呈する有識者は大学関係者の中にあった

のですが、それを積み残してきて本当に学生が多様化してきたという状態になった時にわれわれは非常に準備不足の状態で困っているということになるのかもしれません。中教審の問題意識、これはいろいろありました。私個人的には学習時間を強調する議論は好みではないという発言をしたのです。あまり適切ではないのではないかと言ったのですが、いろいろあって時間というのは分かりやすいとなりまして、分かりやすいのでインパクトのある内容にしなければならない。審議まとめの時にこれがクローズアップされたのですね。確かにデータで見れば学習時間の短さ、しかしこれは中教審が学習時間が増えれば問題が解決するなどとは考えていません。必要条件ではある、十分条件ではない。到達目標は学習成果の質向上だということは審議の中でのコンセンサスとしてございました。その上で議論していくプロセスでキーワードとして出てきたのが予測困難な時代。予測困難な時代と書いて、逆にご批判もあったかもしれません。予測困難な時代だという認識で教育の設計ができるのかと言われたのですが、事実としてグローバル化、少子高齢化、成熟社会化等々で、個人も予測できない、社会も予測できない、私が使っている表現で逆三丁目の夕日症候群と、今の学生たちは、ここにおられる先生方多数派は三丁目の夕日を見て懐かしく思う。明日は今日よりよくなるかも知れないというプロバビリティー。あるいは普通にやつたら豊かになってきた。その人たちは非常に幸せだった。今は私も授業を教えていて学生に 1 年生に、政権交代の前ですが、あと 2 年したら就職戦線スタートする。その時に今よりよくなっていると思うか、今並か、今より悪くなっているかを聞いて、今よりよくなっていると思うと答えた学生全然いないです。並か、今と同じか、悪くなるというふうに思っているわけですから大学での学びにモティベーションが放っておいても高くなるというのは幻想でしかない。はどうするのか。主体的な学びとはこれは後ほどお話をしますが、我々が主体的な学びを作り出すではなく、これは主体的ではありませんよね。主体的とは内発的なものですから内発的なものを作ろうとするこれは条件は非常に悪いと。つまり OECD 年教育使節団やピタウさんの指摘の時代とは一際状況が難しくなっているのだと思います。それでこの答申は皆様もお読みになられたと思いますが、3 月に私と山田礼子、川嶋太津夫、こういう私たちの仲間と小笠原正明先生と一緒に新しい FD で使って頂けるような改革の 30 のキーワードなる本を出すのですが、その時に我々執筆者が議論をした時にこの答申をどう評価するか。私どもは参

画していたのですが肯定的に評価して当然なのですがどういう所を評価していただきたいかという願望であると言つていいと思います。定量的データに注目した。こえは分かりやすかったと思いますね。つまり日本の大学教育には問題があるということを示したわけです。しかしながら質の問題までは、どこの質の問題が深刻なのかまでは描けていない弱みもございます。それと教員個人任せであった高等教育を組織的な共学マネジメントで質保証する仕組みが必要だという議論になりました。途中の私の発言の中で非常に拘ったのは、例えばシラバスとかFDとかに対して小道具といわれる院の先生がおられるのですね。これに私は結構反発しまして、小道具は使っても使わなくてもいいものだと、ある条件では使うけど、ある条件では使わない。そんなことは考えてもダメだと、舞台装置ではないけど学生が学ぶための仕組みを考えないといけないのではないかと仕組み、仕組みと連呼しておったわけですが、それはまさにこの後の内容を見て頂けると分かると思いますが、仕組みが必要なのだと。例えば一番大きな問題は何だったのかと、私は今大きな問題だと思うのは日本の大学授業科目が細分化しそぎているということだと思います。それは是正すべき時はセメスター制の導入だったのです。セメスター制の導入の時に通年でやっていた科目を半期にまとめて週2回にすれば今よりも少しましになったかと思いますが、単純にハサミで2つに切ったわけです。そのままやったので科目数が増えたのが、もの凄く今になってこたえている。1つ1つの科目的学びの密度が落ちている。そういうことに対する1つの問題提起というか改善の方向性を示したのではないかと。もう1つは荒瀬先生ともそうだったのですが高校教育部会の委員と合同協議をして6期の終わりに高大接続部会ということができました。7期でも発足すると思いますけれども、こういうように今まで高校と大学は対岸からお互いの悪口を言い合っているような感じだったのですが、ただいろいろ聞いてみると、例えば高校の調査書を大学はあんまり尊重していない。大学の成績は産業界の方殆ど見ていてない。これは相互不信ではないかという話を教育関係者の中ではいると某教育委員会の教育長がそんなことはないと、高校も中学の調査書を全然信用していない。中学は小学校から送られてくる指導要録を信用していない。要するに相互不信の連鎖が今日の学校教育の危機。K to 16とかK to 12のような全体的なマスタープランもなければ相互不信の連鎖が学校教育にあって、学校教育の終わりの高等教育が一番叩かれ易い状況にあると。というのが現状だ

と思います。そういう意味では一緒に協議できたのは良かったであろうと。それともう1つ学生の声を参考にということで大学教育改革地域フォーラムを始めまして、私どもが第1回目でしたが、これがその後もずっと続いているのは良かった。それと今日隣の部会でやっていますけれどもそれに近い学生が実際の教育の改革に参画していく、それも大事なことだろうと思います。学びのイノベーションの現状と評価を見て頂けますと、これを見て主体的な学びは難しいが、能動的な学びは作り出せるというふうに思います。ただ無条件で作り出せるわけではない。方向性を大体アクティブラーニング、それともう1つは教室外学習プログラム、英語で言えばコアカリキュラムといわれるこれらの総称がハイ・インパクト・プラクティスと。これはAAC & Uというアメリカのリベルアルエディケーションを中心とした大学団体が着目してつけている名前です。これが一番良いと、こういうものが初年次教育ぐらいから始まっていく、こうした方向性についてはだいたいやれば効果、評価があるというものが広く知られるようになってきました。しかしながら、経験学習プログラムの導入は意外と進んでいない。例えばサービスラーニング、インターンシップ、個々の先生が一生懸命やっておられる方はいるのだけれども、大学全体としてどんどん増えていっているかというとなかなかそうではない。GPなどでそんなことを後押ししていた時代があったのですがこれもなくなってしまいました。そうすると教授過程、学習過程の目標設定から実際の運用、改革を進めていく上でかなり組織的な改革をしないと、放っておいてもできないのではないかということです。ちなみにハイ・インパクト・プラクティスはこういう定義です。能動的な学習法とか集団での学習課題を行う方向でグローバルスタディーですか、キャップストーンとか日本の卒業論文に近いですがこういうものを使ってやっていきます。ハイ・インパクト・プラクティスは大体初年次からスタートするというふうに言われています。特色としては能動的、体験型、集団型、調査型、こういう要素を盛り込んでいるプログラムが代表的なものであり、学生にインパクトがあり現実社会とのつながりを感じさせるような内容を持っているということです。いま大体ジョージ・クーが上げていますけどもこういうのがハイ・インパクト・プラクティスの例です。例えば初年次教育でコモンリーディングです。共通の学習体験から学生たちの出会いが始まる。新入生向けのプログラムです。あるいはアメリカの場合で日本と比べると履修科目が少ないのですが、アメリカの大学は大体何科目ぐらい履修するかご存知の方どれくらいおられますか。手を

上げてもらえますか。若干しかおられませんね。それではちょっと当ててみましょう。まず日本ではどのぐらいかご存知ですか。ここで聞いてみます。皆様方主に自分が面倒をみている学年ありますね、4年生はやめた方がいいかな。1年から3年まで自分が一番関わりのある学年想像してください。週何コマ授業を学生たちが取っているか大体分かる方。これは凄いですね。過去私がこの種の質問をした中で一番高い手の上がり具合です。普通今5パーセント以下です。わかんないですね。自分が履修委員とか履修の関わりをやっているのだけれども覚えてない。今日は凄いですね。半数前後おられたということで。これは画期的です。ところがアメリカはどのぐらいかというと大体3科目から5科目ぐらいしか取らない。週複数回、3回ぐらいやる。拘らず、複数の科目同士でラーニングコミュニティー、教員が共通に連携して学生たちも履修同士が連携する。5科目の中の2科目とか3科目でやるのです。そうすればもの凄い横のつながり、これもハイ・インパクト・プラクティス。テーマを統一していく。ライティングのインセンティブとか、様々なプログラムがあります。ちょっと時間が押していますので次にいきます。こういうことをやっていくと力が付いていく。アクティブラーニングは教室での学習プログラムで、外のものがそれ以外としてあるのですがちょっと飛ばしていきます。日本の科目間連携、教育間連携、これを今の話題と合わせて考えてみたいと思うのですが、日本は12科目、考えてみると先生方が熱心になればなるほど、連携がなければ学生にとっては迷惑な話。どういうことかというと、12科目とすると1科目のエフォート率は8パーセントから9パーセントしかありませんので、今まで年に2回勉強するようになったのが中間レポートを出すようになると年に4回だけ勉強するようになった。こういうことがあるし、グループワーク課題、例えばグループワーク課題を出している方。手を上げていただけますか、日常的に。じゃあ伺います。大体どのぐらいの期間で1課題を出されますか。1ヶ月以上の方。2週間ぐらいの感覚で出される方。1週間後の期限の方。ところがこれも考えてみるとグループワーク課題を作ろうとしても週複数回の科目なら比較的できるのですが、週に1回だったらエフォート率は8パーセント、9パーセントの科目のためにグループワークをやらないといけなくて、日本の学生はアルバイトをしていますので時間をどう作るのかということになるのです。ちなみに東京の某短大は時間割の中にグループワークアワーというのがある。この時間は空けておきなさいと。この時間にグループワークをやりなさいと。

そもそもしないと学生たちは残らずに、まじめな学生にだけ負荷がかかってフリーライダーが出るということになるのです。更に教育目標、学習目標、シラバスに先生方が書かれる教員任せだと偏りが非常に大きくなつて、本当は科目間あるいは教育間の連携集約がカリキュラムマップなのですがそういうことができない。ナンバリングというのが持てはやされましたが、このインプリケーションは私はこうだと思います。科目は教員の持ち物でもなければ、学科の持ち物でもない。全学共通のものをどう利用するのかということなのです。これはお店とか、民間の事業を考えてもうと、それぞれの課が備品をストックするような、車をそれぞれの課が持つようなことはしませんよね。共有して使っていくのですが、実は教育の場ではそういうことがなかなかできないのかも知れません。それで私どもの例ですが、私どもはベンチマークというのを作つてこういうものがあるのですが、これをそれぞれの科目が設定するのですが、調整するのですね。つまり放つておくと例えばプレゼン能力などは大学の教員から見ると目標に設定し易いのですが、自己責任感を授業を通して学ばせるというのは放つておくと誰も手をつけない。調整しないと自分たちの立てた目標がなかなか達成できない。そういうことをしないとなかなかできない。先ほどのラーニングコミュニティーではないですが複数の科目があった場合に共通のテーマを作れば、ユニクロの本を読めばいろんな授業でその知識を活用できる。ディズニーランドでもいいです。そういうようなものの考え方はアメリカのラーニングコミュニティーと比べると日本でもできうるやり方なのです。要するにエフォート率は8パーセント、9パーセントを先生方任せにしていると大学の改革や学生たちにとって学びの密度が高くなつて、あるいは自ら望んで主体的な学びを作り出していけるのかというのが大きな問題であろうかと思います。私どもがやっていることで、レポートを出す時期を科目間調整するのです。学生が12科目を取つているとすれば半期の間で、普通放つておくと6週目でやりたがるのですが4週目とか8週目でもいいのではないかというふうにやっていくと学生たちの負荷が分散してやっていくことができる。これは答申の資料もあるのですが学習成果をめぐる議論も非常に散漫になりがちです。なぜかというと、評価対象が学生なのか、授業内容なのかプログラムなのか大学なのか分からぬですし、誰が評価するのか。みんなここは分かることです。教員が学生を評価する。ところが授業科目の評価というのがこの総和が授業科目の評価とは限らないです。達成すべき学習成果に見合つた評

価をどうするのか。更にいうと学育プログラムという形ですから、それぞれの学科なら学科の評価をするのはどういう材料が役に立っているのか。そしてそれを教員の主体の場合と大学というより大きなユニットで見ていく場合では評価の方法も材料も変わってくるのですね。学生の評価は、個人の答案を全員採点しないといけないですが、そのプログラムが上手くいっているかどうかはサンプリングしていくだけでも十分にお互いにチェックすることができる。そういう発想が比較的に日本の場合はなかったのかもしれません。それでループリックの話なのですが、ループリックというのは皆様方あまり聞きなれていなかつたかもしれませんがこういうことです。評価と基準を可視化する。もともとパフォーマンス評価の手法です。それを特定の特長を表す記述法で見ていきまして、アメリカのAACUのバリュー・ループリックが良く知られています。バリュー・ループリックはこういう知的な内容、人格的な内容、よりジェネリックな内容とその相互化について15項目のループリックを作っています。ループリックを使いますと到達目標を明確化したり、採点が容易になるのですが、現物を見て頂いた方がいいかもしれません。コモンループリックというのを私どもの大学では使い始めております。どういうものかを見て頂いた方がいいので先に行きましょう。すみません。現物がないので評価の観点と基準票なのですが、そういうものを共有していくと複数の科目でリサーチとかライティングのループリックを作っています。それを使うことによって評価基準を共有化できる。つまりエフォート率は8パーセント、9パーセントでも学生たちにあらかじめ示してそれに基づいてチェック評価ができますし、それらに基づいてフィードバックすることが容易になります。そうして学生たちの学びに対して何ができるか、何ができるないかを可視化することができます。能動的に学ぶのか、時間もないで少し急ぎたいと思いますが、能動的な学びというのは今申し上げたことを組織的に導入すればエフォート率は8パーセント、9パーセントが3科目、4科目で共通のループリックを使っていく、あるいは共通の素材を作っていくという形で作っていくことができるわけです。もともとのユニバーシティの意味を考えればそういうことになってくるのですが、ただ問題は、私が申し上げているのは殆どが能動的な学びでしかなくて、主体的な学びと能動的な学びは同じではない。アメリカの大学は能動的な学びを主体的じゃなくても学ばせる仕組みを作っているのです。つまり修復数回の授業でループリックを使い、課題を出し学習時間が多いのだけれどもそれが全員主体的に

学んでいるかどうかは、川嶋 太津夫さんも言っていたのですが、主体的な学びというのは結局個々の学生が学びに気付いてもらわないといけない。気付いてもらうためには動機も強化しないといけないし、わくわくどきどきを経験できるような教室外のコアカリキュラムも含め、あるいは教室内で先ほど皆様方おやりになられたようなインタラクティブな学びの時間の共有をしていかないといけない。それと同時に非常に重要になっていくのは学びの成果を可視化していく。ポートフォリオもそうです、少しお話をしたループリックもそうなのです。どういう観点の部分ができるていて、どういう観点の部分ができるてないか見ていただきながら、それを学生たちにフィードバックして振り返りをさせていく。そうした形でPDCAだけじゃなくてAIとか様々な振り返りに対する理論的な枠組みがあるので、学生たちにアクティブな学びの仕組みを導入する中で学生たちが主体的なモティベーションを見つけていくてもらう、そういうことをしていくしか方法はないのではないかというふうに考えております。大学として考えているのは全学のディプロマポリシーとして、もう1つはアセスメントポリシー、自分たちの目標がどういうふうにアセスメントするのか、学生個人なのか科目なのか組織、あるいは学育プログラムそのものの単位なのか。学外者の視点も含めて多様的な協議をしながら学生たち自身にも学びのプロセスを可視化していくことが重要になっていく。最終的には個人の努力よりもチームでの改善、組織での教育という発想転換が重要になっているのではないかということでおざいます。時間を若干オーバーしましたが以上で私のご報告を終えさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

高橋 濱名先生どうもありがとうございました。それでは引き続きまして2番目の発表に移らせていただきます。5分間進行が押している形で進めさせていただきます。続きまして「主体的な学びを育てる仕組み」というお題で荒瀬克己先生の方からお話をお願ひいたします。

荒瀬 皆さんこんにちは。私は今京都市教育委員会におりますが、去年の3月までは京都市立堀川高等学校で校長をしばらくしておりました。今日はそこで考えたことと実際に行ったことをご紹介したいと思います。たぶん私の役割は、大学と高等学校をどのように繋いでいくのかということに関して、高等学校はこんなことを考えているということをお伝えすることだろうと思っております。高大接続だとか高大連携といいますけれども、接

続とか連携を本当にしようとしたら、それぞれが自分の仕事をきちっとしていないとだめで、大学教育がいろいろな批判を受けていらっしゃるようですが、実は高校教育も相当批判を受けておりまして、そういう意味ではお互いに頑張ってやっていきましょうということを私なりに申し上げられたらと思っています。ところで、先ほどの濱名先生、後に登壇されます福田総務部長、そして私と、3人すべてが髭でして、これを高大連携と言うのではありませんが、妙な連携がなされているなと思いながらお話をさせていただきます。

資料は誠に申し訳ないのですが、冊子にはレジュメのみを掲載していただいています。もしもこのスライド資料が必要だということでしたら今ご覧になられているメールアドレスの方にメールを頂きましたら、文字の部分の資料をお送りいたします。生徒の写真を使ったものはお渡しすることはできませんので、その点どうぞよろしくお願ひいたします。メールアドレスは、また後ほどもお知らせいたします。

今日は、私は4つのことを申し上げたいと思います。1つは高校生が勉強しないということ。それで高校教育がだめだと言われているのですが、そのことを。それから、そもそも高等学校卒業までに、すなわち初等中等教育の間に、どういった力を付けることが必要なのだろうかということ。それから実際にそういったことに基づいて具体的に堀川高校というひとつの学校でやった取り組みです。

堀川高校と申しますと、いわゆる進学校だとお思いの方もあろうかと思います。確かに進学校なんですが、進学する生徒が多いというのはすなわち大学に行ってどんな学びをするのかという基礎を高等学校の間にきちっと身に付けさせておかないとならない責任があるということだと思っています。大学に合格させることだけが進学校の目的ではありません。また、来年の入試から変わりますが、京都の公立高校は、普通科は総合選抜制度という全国でもほとんど例のない制度を取っておりまして、いわゆる上澄みだけを取つくるとよく言われますが、そのような生徒だけが集まっている学校ではありません。実に多様な生徒が学んでいます。その中で私たちが考えたのは、偏差値的にどうであれ、学ぶことの楽しさを得た生徒は、それが主体的な学びなのか能動的な学びなのかは先ほどの濱名先生のお話を承つておりますてなかなか難しいなとは思うのですが、少なくとも自分で勉強するようになっていく。これについては後ほどご紹介いたします。

そして最後には、何のために高校教育はあるのかとい

うことを申し上げたいと思っています。

まず勉強しない高校生ということですが、この図はよく使われている図で、ベネッセの調査です。高校生の平日の学習時間の経年比較。一番右が120分、2時間です。偏差値の高い集団ですね。ここでは単純に、低い、高い、真ん中と言ってしまいますのでご了承ください。低い集団は学習時間が少ない今まで、そんなに変化していません。高い集団はやや変化はありますが、ほぼ変わらず学習時間がまあ多いまま。ところがこの真ん中のボリュームゾーン、ここにいちばんたくさん生徒がいるわけですが、それが全体的に相当下がっている。どんどん勉強しなくなっているわけです。大学教育がユニバーサル化されたと言いますが、進学する生徒の多くが、高校時代に勉強していない集団。

こちらは細かくて見にくいのでざつとした話をしますと、アメリカの大学生の1週間の学修時間です。アメリカで一番多いのは、60パーセントぐらいの学生は、10時間から11時間勉強しているようです。日本で一番多いのは1時間から5時間。この黄緑は何かといいますと、10パーセントぐらいは全く勉強しない学生がいること。なんと日本の大学生は、高校生も勉強しませんが、その延長線上なのか大学生も勉強していないということです。

文科省の研究委託で北海道大学が受けられました先導的大学改革推進委託事業で「高等学校段階の学力を客観的に把握、活用できる新たな仕組みによる調査研究」というものがありました。いわゆる「高大接続テスト(仮称)」というものが提案された調査研究です。北海道大学の佐々木隆生先生が中心になってまとめられました。濱名先生も委員に入っておられまして、私も入っておりました。このまとめが2010年の9月に出たのですが、そこに「底の抜けた高校教育」と書かれています。書かれていましたというか、一応書いた側の1人でもあります。

「底の抜けた高校教育」と言われた高校教育の実態は、生徒に基礎学力を付けられない、学習意欲を引き出すことができない、生徒は教えてもらうのを待つだけだし、楽なことはしてもいいけど面倒なことはしたくないとか、こらえることができないとか。こういった状態は高校教育の責任ではないかといった議論がありました。

そういうこともあってかと思いますが、中教審としては20年ぶりに、高等学校教育部会というのが設置されました。すべての生徒が身に付けるべき能力としての「コア」と呼ぶものの内容について、基礎的に身に付けるべき能力が何なのかについて議論が行われています。

その中で、労働政策を研究なさっている1人の委員は、高等学校教育に期待されるものは、将来社会に出てから自分で生きていくための力、それは何かというと学習力だとおっしゃいました。自分で学ぶ力。自分で学ばないといけないのだと。私自身はそういったことも含めて、1人の市民として他と関わりながら生きていく上でどんな力が必要なのかということ、「市民性」と、まさに学習意欲というものが必要だと思っています。これはまだ途中で、今後継続して議論がなされます。

一方、高大接続特別部会が設置されました。グローバル化だとか、グローバル化という言葉自体の意味も考えないといけないと思いますが、グローバル化だと大学教育のユニバーサル化、その中で学士課程教育の質保証が求められている。入試も現状の問題を考えて適正化しないといけない。また、高等学校に中学校卒業者の98パーセントが入学して高等學校は本当に多様になってきている。こういう中で高大の接続をどうするのか。そういう議論が始まっています。

議論の中で、大学からの要請とか、社会からの要請があるということで、それはその通りなんでしょうが、高等学校教育をどうしていくのか、大学教育をどうしていくのかということには、もう一つ重要な視点があると思うのです。何かといいますと、将来の生徒からの要請です。結局彼らが一番困っているのです。私たちは、学生は勉強しない、学生は主体的な学びができない、高校生もだめだと言うのですが、結局最終的に本当に困るのは、将来の彼らなのです。こここのところは教育に関わる者全てがしっかりと持っていないとだめだらうと思うのです。

大学に入学したらどんなふうに生きていくのか。高等学校関係者に対して考えてくださいと言っていますのは、高等学校を卒業して全員が就職するとしたら、どんな力が必要なのかを考えてみましょう、ということです。そこが実は抜けている。たとえば、進学校といわれているところは、大学に受かればなにか仕事をしたような気になってしまってはしないか、本当にそれでいいのか、ということです。

じゃあ、高校までに身に付ける力は何か。学校教育法の第30条、これは小学校に関する規定ですが、準用規定となっておりまますので中学校も高校もすべてこのことをしなければなりません。いわゆる学力の3要素が30条第2項に書かれています。基礎的・基本的な知識・技能。その活用力としての思考力、判断力、表現力、その他の能力。そして主体的に学習に取り組む態度。まさに学習意欲であります。この3つが学力の

重要な3要素と言われているものです。

高等学校教育、学校教育法の第50条にいろいろ書いてありますが、要は国家及び社会の形成者を作らないといけない。また進路を自分で選択できる力を持つといけない。また、社会と個人との関係でいうと、個性の確立を促すとともに社会についての深い理解と健全な批判力を身に付けさせなければならない。ですが、ほとんどの高等学校においてどうかというと、残念ながら、といった状態ではないかと思うのです。

平成26年度、来年度から京都市・乙訓地域の高校入試が大きく変わるので、いま声高に呼ばれているのが、各高等学校の特色化ということです。特色のある高等学校を作るのだと。特色ある学校とは何かというと、これは非常に難しくて、簡単には答えられないよう思います。極論かもしれません、私は特色化などどうでもいいと思っております。京都市教育委員会の設置している高等学校は9校しかありませんが、この9校の校長に申しておりますのは、特色化よりも何よりもその前に高等学校教育としてどのような力を付けるのかを共通してやってほしいということです。特色化よりもむしろ高等学校教育の普遍性とは何かを是非考えてほしいと言っています。学校教育法に基づいて、ですね。そのためには中学校と連携をしてほしい。中学校教育にどういうことを注文するかといったら、高等学校教育でこういったことを身に付けさせたいから、その連続性から中学校教育ではこんなことをやっておいて欲しいということを話し合ってほしい。今日は高大接続の観点でお話ししていますが、京都市教育委員会では中高接続プロジェクトという組織を立ち上げて取り組んでいます。

何度か会議を持ちましたが、最初はほとんど言葉が通じません。中学校の校長と高校の校長は言葉が通じないところからスタートしています。しかし、若者のために、それを乗り越えていこうとすることが、本当の接続を実現するための中高の繋ぎを生み、まさにめざすべきキャリア教育を実現するために必要だらうということを考えているだいです。

この表は神戸大学の川嶋太津夫先生がお使いになっているものをお借りしたものです。大学で特定的なもの、学問的な専門の分野でしょうか。大学で一般的なもの、これは教養とか学生生活でしょうか。社会的で特定的なもの、働く上で、社会で、特定的なもの。技術、経験、あるいは営業のノウハウといったことかもしれません。そしてこのDの部分ですね、社会に出た際に共通に必要なもの。汎用能力だとかジェネリックスキルという言葉で示されているものです。

この力を具体的に考えていく上で我々は3つの能力を考えました。1つは批判的思考力。学校教育法で、高等学校で身に付けさせないといけないと言われているものです。批判的思考力。それからメタ認知能力。そしてこれらにとって必要な構造化というような技術。この3つです。これらは能力であり技術。能力や技術であれば教えられるし、生徒は身に付けられるし、さらにそれをスキルアップさせることもできるというふうに思っています。この能力や技術は、もちろん基礎学力がどの程度あるかにより左右されるとは言え、繰り返しますが、すべての生徒が身に付けられますし、現にそのようにしてきました。それについては後ほどお話しします。

批判的思考力。これは三森ゆりかさん、筑波の言語技術教育研究所所長をなさっておられる三森さんが、非常に単純明快に書いていらっしゃる。ご覧の通りです。こういう力は当然欲しい。高校生にも欲しい、大学生にも欲しい。メタ認知。これはご存じの通りです。そして構造化。高校生に構造化と言うとなかなか通じないので、物事は様々な要素によって成立しているので、その要素をどんなふうに読み解いていくのかを考える。全体を把握したうえで構成要素を明らかにして要素間の関係をわかりやすく整理して、その際都合の悪い要素を切り捨てない、そういうことをすると悪い政治家になってしまう。どのように構造化するのかというのを体験するために練習問題を作ったりしてやってきたわけです。構造化ができると全体が把握できるために、漏れとか、重なり合いを回避しやすくなりますので、文章を書くときもすっきりする。また要素間の問題が明らかなので、修正とか問題解決の際に的確に対処ができる。これは生徒たちに活動をさせる上で非常に重要です。活動する上で基礎的な力となります。情報共有をしやすいこともあります。すなわち構造化という技術を身に着けていくことは、問題解決だとコミュニケーションといった場面で大変役に立つということです。

また、コミュニケーションとかコミットメントはとても大切な力だといわれます。コミュニケーション能力はコミットメントの能力と一体のものだと私は思っています。コミュニケーションを何のためにするのかというと、コミットメントのためです。関わり合う、参加する、そのコミットメント能力やコミュニケーション能力をどう高めていくのかということのために、先ほどの批判的思考力とか、メタ認知能力とか、構造化とかといった能力や技術が必要になる。

グローバルコミュニケーションスキル。異文化理解能力、要は異なるものを理解して調整する能力であるとい

うことを平田オリザさんは言っておられて、みんな違ってみんないいんだけれども、実は、みんな違って大変だ、と言ってらっしゃいます。日本が成長社会と言われている間はみんなが概ね一緒だった感があります。ところが成熟社会、これは言葉が綺麗ですがもう成長しないということですね、もう大きくなれない、逆にこれからどんどん崩れていく、それをいかに繋ぎ止めるのかを考えていかないといけない時に、いろんな考えがいろんな人にあって、しかも世界との関わり、海外との関わりを持っていこうとすると、歴史も違う、宗教も違う、文化も違う、食べ物も違っていてという、そういう人たちといかにして合意を図っていくか、いかにして違いを違いと認めながらそれを調整していくか、といったことがこれからの方には必要です。それなのに、高等学校は相も変わらず入ってきた生徒をただ送り出している。しかし、進路が決まれば大喜び、というだけではだめだろうということを思っている高等学校関係者はとても多くいます。ですから、高校と大学がそれぞれの責任を果たすこと、生徒・学生の成長ということを軸に接続や連携を大いにやっていくことが必要だというよう思います。

コミュニケーションについて、ずいぶん以前にこういう指摘がありました。「人間誰しも成長するにつれて家庭や近隣のフェイス・トゥ・フェイスの第1次集団から脱して気心の知れない社会集団に組み込まれる。そこで伝達は相手と自分とは異質のものだという前提が必要になる」。これはまさに今に通用する文章です。「言葉とは相手との心理的、物理的、文化的距離によって最適な表現形式を決めなければならないことを思い知らされる。この認識がないと伝達は独りよがりになる。ついにはどうせ話したって分からないと思い、自分の殻に閉じこもる仕儀となる。あるいは類は友を呼ぶで、同質の人間としか付き合わなくなる」。こういう若者が増えているというような危惧、指摘があるわけです。これは平成7年、1995年に書かれたものです。この時期にすでにこういう指摘がありました。今はそれが具体的に増えてきてしまっているのではないか。ならばコミットメントやコミュニケーションということをもっと考えて、いかにそれを高等学校段階でやっていくか。

しかし、コミュニケーションというのは決して容易ではない。どうして難しいのかを考えると、なぜ伝えにくいかというと、それぞれに文脈があるからです。ですから先ほどの構造化などが必要になってくる。文脈を明らかにできれば、自分の文脈、相手の文脈をきちんと確かめて通じ合わせていくことをすれば。しかし、これは

本当に大変なことですね。この面倒なことをしなければならないというのが今の若い人たちであるわけです。

堀川高校を昨年の3月に卒業した生徒の言葉をご紹介します。海外に行って価値観が変わったとよく言うけれども、自分は「3年間の高校生活を経て価値観が増えた」と思っているんですね。どういうことかというと、「価値観の相違だと思って切り捨ててしまうとあまりにももつたない」。ここに出てくる探究基礎というのは後ほどご紹介いたしますが、それをやっていく中で「こんな見方もあったのかと腑に落ちる経験をした」と。体験的な学習は非常に重要だということあります。価値観が増えるとどうなるかといいますと、「自分の価値観がはつきりと見えてくると同時に、場合によっては偏った一面的な見方しかしていない」ことにも気づく。あるいは対話を通すことの重要性。それらば「スリリングな体験だ」と言っています。そういった異なるものと関わること、異なるものに向かい合っていくこと、わからないことに向かい合っていくことをスリリングだと思えるというのは、まさしく主体的な学びが生まれようとしている瞬間ではないかなと思います。

堀川高校でどんなことをしているのかと申しますと、「探究」という活動です。「探究」というのは求めると書く「探求」ではなくて究めると書く「探究」。求める「探求」はサーチです。存在する答えを見つける。究める方はリサーチ。なかなか見つからない、ひょっとしたら現在は分かっていないかもしれない、ないかもしれない、それを自分の課題として自分で設定して取り組んでいく、そういういた探究活動をしています。

その際の5カ条というのがこれです。これはどつかで聞いたことあるようなことばかりが並べられていますが、これらを具体的にやっていこうということあります。ここでも当然ながら先ほどの3つの能力・技術が必要です。その基になるのが学習意欲。加えて、高校生でありますので、簡単には折れない心といのも大変重要です。この大変重要なことをどうやって付けていくかというと、体験的な取り組みを通して身に付けていくことが最も効果的ではないかと考えています。重要なのは、ここでは必ずしもすべてが用意されているわけではないということです。

この会の趣旨に反するかもしれません、FDは重要ですし、皆さん大変熱心にやっておられることを批判したり揶揄したりする気は毛頭ないのですが、実は大学の授業というものは、別に分かりにくいものであってもいいのではないかと私は思っています。堀川の生徒にはそのように言ってきました。大学の授業は分かりにく

いと。分かりにくいものを分かりにくいといってバッサリ切ってしまうような学生になるなと言つてきました。

たぶん、先生方がFDに取り組まないといけないのは、初等中等教育が十分でないからです。どうしてか。先回りして何でもかんでも用意してきたから。何でもかんでも用意しない初等中等教育を作らないといけない。用意しないというと、1、0の発想しかない人は放つておけばいいとなるわけですが、そんなことは全くダメで、仕掛けを作ってその仕掛けの中でいかに生徒たち自身が活動をしていくかを考え、それを支えていくような学校にしていく、具体的に取り組む、それが重要だと思っています。すべてが用意されているわけではない。しかしそこには仕掛けはしっかりと用意されている。

ところが社会全体が、安心、安全、簡単、手軽を求めてています。もちろん通学路は安全でなければならぬし、学校は安心できる場所でなければならぬのだけれども、見守られている中の不安であるとか危険であるとか、複雑なこととか面倒なこととか、守られているうちにやっておかないと守られなくなつてやりなさいといわれても、できないわけですね。これを初等中等教育は真剣に考えていかないといけないと思っています。

そこで探究基礎という授業なのですが、これは学び方を学ぶ取り組みです。学び方を学べたかどうかが成果となります。1999年から始めましたが、当時ベストセラーであった東京大学出版会発行の『知の技法』を随分参考にしました。これは文系学生のための本でありますけれども、これを大いに参考にさせていただきました。「問題の立て方、認識の方法、論文の書き方、発表の仕方など学問という行為を構成している様々な手順には、それぞれの時代に一定程度共有されている技術なり作法がある」。ならばこれを教えようと考えて始めたのがこの探究基礎です。

堀川高校では課題解決能力という言葉をよく使いますが、ここで言う課題解決能力とは、不思議に気づき、それを取り組むことのできる課題に設定して、ここで構造化が必要になりますが、そして自ら解決を図るという一連の流れを課題解決能力というふうに呼んでいます。重視するのは流れとしての4つの力。「受けとる力」、「考える力」、「判断する力」、「表現する力」。それらを繰り返して1年半の間取り組みます。

1年生の前期では、まず知るための基礎を学ぶ。生徒が話し合って情報の受けとりについて考えます。当然、図書館で本を読む、インターネットで外国の論文を読む、そういうこともあります。後期では、ゼミという少人数の講座に分かれてその中で具体的なテーマに向かって取

り組んでいく体験をしていきます。その最終段階で、2年生で行う個人研究のための研究計画書を作成します。それに基づいて自分の研究テーマを探求していきます。そして発表して、論文にまとめるという、そういう流れで取り組みは進みます。

この写真は、生徒が最初の段階で、学ぶということはどういうことなのか、物事を知るということはどういうことなのかということを生徒自身で話し合っているところです。教員は周辺で見ていて、やり方を伝えたあとは、生徒自身が運営していきます。この写真は1年生の後期になってゼミに分かれたところで、こんな少人数でできるのは、有難いことに文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールに指定されているからです。お金もあり、大学院生も雇い入れています。

大学院生を雇い入れる時に文科省とのやり取りでちょっとした行き違いがありました。大学院生を雇い入れるのは文科省も想定していたのですが、想定の中身というのは大学の先生方に来ていただいて、その際に大学院生がティーチングアシスタントとして付いてくる。実験の準備、大学の先生の授業中のアシスタント、後片付け、それらをするのが大学院生であると。しかし、私たちは大学の先生をお呼びしないで私たち自身がやっていく中でティーチングアシスタントを雇いたい。理由の1つは、授業を進める堀川の教員の指導力を高めるためです。大学を出て時間の経過とともに錆びつきつつある専門の知識を、最近の最新の研究に携わっている大学院生を通じてブラッシュアップを図る。もう1つは、高度な授業のための、授業を進めるのは堀川の教員ですが、その授業のアシスタントとして。実際に授業をする時に、特に複雑高度な実験をする際に、1人の教員ではなかなか手が回りませんので、そういう時に大学院生がいてくれると円滑に進行できるので。そういう理由を伝えて、文科省にも認めてもらって、いまは10数人の大学院生に来てもらっています。

生徒たちは個人研究のための研究計画書を書きます。けれども、その研究計画書がなかなか通りません。ちょっとやそっとでは通らない。あの本を読んだかとか、君のこの論の立て方がおかしいとか、そういうやり取りが何度かあって、それには堀川の教員と大学院生が当たります。ここで実は私たちが付けたいのは、社会に出てから必要になるであろう、「段取りを組む力」です。研究者をめざす卒業生もいますが、必ずしも研究者を養成しようとしているわけではありません。「段取りを組む力」を付けたい。実際にやってみてうまくいかない時に何とか工夫するとか、あるいは失敗した時にそれでも

前に進もうとするか、そういう体験を積ませたいと考えています。

これはゼミ内で自分の研究計画について発表しているところです。そしてよいよ個人研究です。論文にまとめていきますが、この時も構造化とかの言語技術を学んでいます。また、定義であるとか、根拠であるとか、論理であるとかといったことは、生徒自身が自己評価もします。教員は何をするかというと問いかけるだけです。これは意味が分からぬがどういうことかと聞くだけです。答えは教えない。生徒の個々の研究は生徒数分ありますので、なかなか大変です。

発表の練習もして、こういった形でポスター形式での発表をします。ポスターのパネルもスーパーサイエンスハイスクールのお金で買いました。ポスター形式の発表をいたしますが、この発表は一方的な発表ではありません。聴衆がこれに対してもいろいろと質問をいたします。指摘もいたします。それをメモして、そういうことも取り込んで最終的に論文にまとめます。要は完成した研究発表をするのではなく、途中なのだけれども気づきを生む場面を作りたいということあります。

探究基礎をやった生徒から、面白い言葉が生まれました。「楽しんどい」という言葉です。楽しいけどしんどい。しんどいけど楽しい。どうしてかというと楽しいのは自分でできるから。しんどいのはどうしてかというと、自分でしなければいけないから。でも自分でしてなにがしかの成果を得るという経験をここで持ってくれることは、彼ら彼女らの将来にとって非常に意義があるのでないかと思っています。そして最終論文にまとめる。

これらは試行錯誤を促す取り組みです。また、生徒は授業の進行のために探究基礎委員会という組織を運営します、そういう意味でも生徒には大きな負担ですが、これはいわゆるPBL、Problem Based Learning、あるいはProject Based Learningで、論文ができるとか物事が進んでいく表舞台に至る舞台裏、バックヤードを経験することになります。リハーサルが一番面白いという生徒もいます。見えるものは見えないところで準備されている。先ほど申しました「市民性」といったことを、こういったところからも養えるのではないかと思っています。言葉をやたら使いますから。しかも構造化などを経験していますので、体験型の言語技術の鍛錬が図られるのではないかと思っています。

さて、これは文化祭の様子です。高校3年生が文化祭に向けて2か月以上かけて取り組みます。一部には、保護者も生徒本人もですが、文化祭に一生懸命に取り組んだら大学に受からないのではないかという心配

もあります。また、探究基礎などの、受験に直接結びつかないことをやっていたら受からないのではないかというご指摘もあります。しかし結果はそんなことは全くないということを示しています。特に探究基礎が熱心な学年、それから文化祭の取り組みが熱心な学年の方が良くなっているのです。どうしてかといえば、彼らは始めてから終わりまでを知っている。始めから終わりまでをどうして知っているかといえば、用意されていないからです。自分で始めて、自分で取り組んで、自分で終わるという経験を持っています。これは文化祭が終わった後なのですが、祭りの後がどんなものかも彼らは目撃し経験することができる。

様々な取り組みが単発的に行われていれば全く意味がありません。これらは繋がっていることに意味がある。ところが、多忙を理由にこの繋がりが十分に確保できていない学校があるのが残念です。やっていることは、実はどこの学校もよく似ています。これをどう繋げるかです。繋ぐということがとても大切で、ここで培った力を次にどう活かすのか、そのためには常に評価が行われていないといけません。

私たちがめざしているのは、将来どのように生きていくか、つまりキャリア教育だということです。これは学習指導要領の重要な柱の1つでもあります。これについて最も具体的に見える場所は特別支援学校です。彼らに将来「働く」ための力を付けていく。これは仕事に就くという意味でもありますし、生活をしていくという意味でもありますが、両方の意味で、キャリア教育が特別支援学校では大変熱心に行われています。

白河総合支援学校という京都市の特別支援学校で行われた研究発表会に立教大学大学院の渡辺三枝子先生がお越しになりました。講評をなさったのですが、その中で、「働く」ことを学ぶというのがとても大切だとおっしゃいました。「働く」ということは「勤める」とは違います。「勤める」は就職ですが、先ほども申しましたように、「働く」というのは日常生活も含めてだということです。その中で他者との関係をどう結ぶか、そこで自分の能力をどう活かすか、他者のために何かをする、そこから喜びを得るとか。こういったことが主体的な学びを生むきっかけになる。そしてそれが大学での学びにどう繋がるのかが私たちの関心です。こういったことをするのが結果的には大学での学びとか社会に出てからの、その人の生きる力に繋がっていくのではないかということを思っています。将来、大学を出た後も面白く働くにはどうしたらいいのかということが重要ですから、言い換えれば、ずっと居場所とやりがいを求め見出して生きてい

くのですから、その居場所を自らつくる、やりがいを自ら見出していく、そういう力を付けるためにも、付けるためにこそ、主体的な学びがとても必要なんだろうということを思っています。

「開かれた個」。これは中教審が2008年に出した新学習指導要領編成に向けての答申にある言葉ですが、「開かれた個」という、ここに込められた意味を実現する学生や生徒に育てていくことがとても大切だと思っているしだいです。どうもありがとうございました。

高橋 荒瀬先生ありがとうございました。只今の荒瀬先生がご使用になられたパワーポイントの資料につきましては、先ほどのメールアドレスに送って頂ければもらえるということなので、もし必要な方がいらっしゃいましたら直接メールでやり取りをしてください。

それでは引き続きまして第3番目の発表に移らせていただきます。3番目の発表は高知工科大学の福田直史総務部長からお話をさせていただきます。タイトルは「主体的な学びを支える仕組みーKUTの環境設備ー」です。それではお願ひいたします。

福田 こんにちは。高知から参りました福田と申します。3番目の髪の登場でございます。濱名先生が全体で荒瀬先生がこの上だけで私は下だけで。うまい具合に役割分担ができているのかなと髪の部分で思います。でも共通点もありますメガネでございまして、話の中にも共通点があるのかなと思っておるところでございます。私の話なのですが実はずっと大学職員をやっていました教員のサイドではありません。入試や、企画、広報とか調整とかそういったことをやっていたので、全然教務室も経験していません。おそらく私、場違いな人間が場違いな話をしていくのだろうと思っています。お2人の先生は中教審の委員もやられて、凄い先生の後に私でいいのかと困るところですが、なぜここにいるかというと、四国にSPODという組織がありまして、SD、FDを四国全体でやっていこうというために愛媛大学さんが国のお金で作った組織です。そこ今年何故だか私も取引されまして参加することになりました、そこに今日の仕掛け人の先生方が何名か来られていたようですが、ちょっと面白そうだから硬い話の後に突っ込んでしまえという発想でこの場に参加させてもらっているということでございます。SPODの方も実は同じことをやっていまして、SPODの方では学生に深い学びをもたらすという意味でのアクティブラーニングの話でした。ポイントはここに教員、職員と共に考えるということで、職員

も参加しないといけない。溝上先生とかゲーリー先生とかこういった先生ばかりなので職員も必要ということで先生対策として私が選ばれたという経緯があります。この中で職員の立場ではありましたが大学に関わる人間として、実際に教育者とは言い切れないかも知れないですが、教育について真正面から取り組むべき役割を担う1人だと自分では自覚していまして、そこで先生方とお話をさせて頂いたわけです。これがその時の私のテーマです。「アクティブラーニングを促す環境整備」ということで、実は今日のテーマと殆ど一緒なのです。今日も仕組み作りということなのでうちの取り組みを幾つかご紹介させていただきますけれども、実は私はこの時までアクティブラーニングという言葉すら知りませんで、何ですかということで改めて勉強しました。その時にキーワードとして能動的な学びと主体的な学びという言葉を拾いまして、それについてそこから付け焼刃で勉強していくわけです。さて今回のフォーラムでも実際にタイトルとしては主体的に学ぶ、それから主体的な学びを支える仕組み、こっちの方なら私にも話ができるのかなと思い、お受けさせていただきました。見比べてみると同じことをやっているのです。SPODの方でも、深い学び、主体的な学び、アクティブラーニング、支える仕組み、SPOD、FD フォーラム共に課題としては共通のものがあるのかなと感じております。先ほど申しましたけれども私は先生ではありませんので、教育的課題の重要性を話していいのだろうかとだいぶ迷いました。でも仕組みの部分であればお話しもいいのかなと思い、お話をさせていただきます。

これは SPOD の前に私が付け焼刃で勉強したことです。アクティブラーニングの個人的な解釈だったのですが、アクティブラーニングというのはその学生をその気にさせてやる仕掛けなのだろうなと。その気になつたら学生は勝手に勉強していくと。そしたら使える人材になるだろうと。こういうふうな理論を自分の中で構築して先生方にぶつけてみました。そこで先生方に言われたのが、この間に実は1つあるのだよと。仕掛け、勉強する、使える人材になる、その間に入っているのは何かというと、アクティブラーニングで得た習慣、まさに堀川の取り組みはその習慣をつけるものだと思いますが、そういった習慣がアクティブアクションに繋がっていく。このアクティブアクションに繋がるからこそ使える人材になる。だから習慣づけになるような仕組みを作っていくしかないといけないということを理解させていただきました。ちょっとだけまじめに考えさせてもらいまして、私なりに考えるとアクティブラーニングを通じて人間力を養成す

るのでないかと考えました。その時の私の定義なのですが、考える力、行動する力、創造する力、実行する力、チームワーク、コミュニケーション、この辺りをアクティブラーニングの仕組みでもって育ててあげるのかなというふうに考えてみた部分です。今日場違いな私がしゃべることはこの3本のことになっています。先生方相手にちょっとだけ教育とは何かを話させていただきたいなと思います。それから高知工科大学はわりと教育についてはしっかりとした仕組みを持っていまして、その基本になるのが教育哲学といったら“おっこう”かもしれません。“おっこう”は高知弁ですね。オーバーかもしれませんのが、どういった考え方の中で我々が展開しているのかという部分。それから最終的にどういうことをやっているのかを紹介させていただきたいなと考えています。それでいきなりですが教育とは何だ、これは予稿集にも書かせて頂いていますのでもうお読みになって頂いたと思いますが、ソクラテス、プラトンの言葉です。学長が今年から教養教育の授業を始めまして、そこの第1講目で使っておられていました。ソクラテスさんは自ら発見させるもの。自分で考へないといけない。お弟子さんのプラトンさんは基礎的な知識を与えた上で段階的に深めていくのだと。これは全然変わらないですね、今も昔も。大昔ですがソクラテス、プラトンの時代から教育はこういうものだということだと言っている。もう1つ。これも1927年という古いのですが、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドというイギリスの数学学者の方です。『考え方原則を教えて若者の雑多な知識を社会生きる人の力に変えるのが大学教育である。』ということをおっしゃっていたようです。これもまた全然変わりない。その通りです。でも何故今主体的な学びかというのは実は僕の中では妙に納得できていないところであります。そもそも大学とは主体的じゃないのか。でもそこで「主体的な学び」というテーマでみんなで勉強しないといけなくなつたのは何故なのか。これは後々また議論させていただきたいところだと思っています。それで先ほどお話をしました高知工科大学の教育哲学の部分でございます。実は先ほどの言葉で社会で生きる人の力というの『the power of a man』というそうですが、これを『人間力』と最初に訳したのがどうやら調べていくと、うちの初代学長の末松先生ではないかという説が出てまいりまして、あるところの文章によると間違なくこの人が最初だと言っているのですが、まあ『人間力』といっている先生が創った大学ですので、最初のうちからこの哲学でもって大学の設計がされていたのだと。末松先生がおっしゃっていたのは、偏差値ばかりではない、学力

だけつけるようではなく『人間力』をつける教育をしないといけないと。よくおっしゃっていたのは、『行って考え、考えて行う』、ずっと考えながら動いていなさいということを先生からは教えていただきました。もう1つあるのですが、それが『人が育つ大学』という言葉です。これはうちの今の理事長、2代目の学長、末松先生と大学の基礎を作った先生の言葉です。実は川口先生の高校の先輩にあたるのですが、岡村甫理事長がおりまして、その方は人が育つ大学であるという言葉を使っております。人が育つ大学というと、何か任せみたいな気がして、実はこの言葉を先生が作った時に、私は広報担当をしておりまして、『日本にない大学』というキャッチフレーズをつけまして広報活動をやっていた時がありました。先生はどうもそれが気に入らないというので、1年後に出てきたのが「人が育つ大学」という言葉でした。育てますならまだしも育つと放り投げていいのかと聞くと先生はあっさり答えました。人を育てるなどとはおこがましい。育てることは私にはできない。自分の子供も嫁が育てたと言っていました。ただ、人が育つための手助けはできると、それは環境の整備だとおっしゃっておられて、その環境にさえ放り込みさえすれば勝手に育つのだと。先生は学生だけではなく教職員、本学に関わるみんなが育つ大学を作りたい、こういう考え方をお持ちの先生です。本学はこの2人の教育哲学の下で大学設計をしているみたいです。はつきりとは聞いたことはないですが、しているみたいです。最初から勝手に育つためのシステムが組み込まれた大学。ここを今回ふうに言うと、主体的に学ぶ仕組みが組み込まれて人が育つ大学と言っていいのかもしれないなと思っています。そういう目線で高知工科大学の実際の事例を取り上げさせていただきたいと思います。学習環境整備ということでここからが本当の今日の僕の役割なのですが、あと10分しかないので10分で流していきますが、高知工科大学流にいう人が育つ仕掛け作り。育つですから主体性は彼らにあります。これをどうやっているのか。実はアクティブラーニングの勉強をするまでこの目線で大学を見たことは一切なかったです。ただアクティブラーニングというのは環境整備も必要だし、仕掛けも必要だから、ひょっとしてこの取り組みがそうではないかと外から言われてその目線で見てみました。人が育つための仕掛けはいっぱい作っているなというのに初めて気が付きました。まずは建物。ハード面ですが、コンセプトは人と人が交わる場ということです。この考え方で建物のほぼ全てが設計されているのですが、人と人が触れ合うことでの刺激、周りの人間のやっているこ

とに触れることで得るモティベーション。そういうものを与えるため、設計思想からこの考え方方が入っている建物を用意しています。これが大学の全景なのですが全部の建物が、雨が降っても、高知は雨が多いですから、雨が降っても全部傘がいらないように屋根をつけて通路などで繋いでおります。この辺も仕掛けの1つかなと思っていますが、そうすると不思議なことに通り道を作つてあげると学生はそのとおりに通り道を通ってくれるのです。あっちこっちを勝手に歩くのではなく、通り道を通るので人と人が必ず触れ合うようになっている。小さい大学だからできることかもしれません。特徴的な建物として、教育研究棟というのがあるのですが、『教育研究』棟なのです。教育と研究を一緒にしています。この建物を見て頂くと分かるのですが、広い廊下なのですがこっち側は全部教室、こっち側は全部研究室なのです。間に椅子を置いて研究に疲れた先輩はここに出てきて休憩しています。授業の待ち時間の学生はこっち側で授業を待っています。こうやって研究室と普通の教室に向かい合させにすることによって、ここに小窓をついているのですが、中の様子が全部見えます。研究室は外からの写真がないので中からの写真ですが、1、2年生が授業を待つ間にその小窓から中の先輩が何をやっているのか。工学系中心ですのでどんな実験をしているのか。そういうことに常に触れることができる仕組みを作っております。ディベート用の講義室も作りました。4階部分、これも特徴的なのですが、これが先生方の教員室なのですが、ちょっと狭いです。18平米ぐらいです。周りはすべて教員室です。教員室を狭くした分、真ん中に広いスペースを作りました。これをコモンスペースと呼んでいますが、これを誰が使っても構わないのです。だからここで宿題をしている学生がいます。議論をしている先生がいます。宿題をしている学生の隣で先生が何をしているのかを聞いて、どんな課題かを聞いて、ここで会話が始まります。そして他の学生が寄つて来て、いつの間にかここで授業が始まります。そういうふうな使い方で仕組みを作っています。中にはサイエンスカフェ的に海外から研究者が来た時もこういったスペースでプレゼンをしたりだとか、日常的に行える環境を整えています。コモンスペースは何かというと、文章はいっぱいありますが、先ほど説明した部分です。人が育つ大学の仕組みをもう1ついきますと、今度は長所を伸ばすというコンセプトで、クオーター制をやっています。最近早稲田大学さんがクオーター制を取り組むということでやつと日の目を見たのですが、先ほど濱名先生のお話にもありましたように授業の1週間の間、うち

は大体 6 つぐらいですね。1 週間というか 1 クオーターの間に。48 単位キャップを儲けておりましてそれを 4 クオーターで回すわけですから 12 単位。大体 1 科目 2 単位ものですから 6 科目。月木 / 火金が同じ授業で週に 2 回ずつ、8 週間で授業が終わります。そういうたった仕組みを作っております。それから全科目選択制しております。この 2 つは実は大学を作った時からそうですが、文部省に法令違反だとだいぶ言われながら、こそそと生き延びてきて、やっとみんなに認知されてきたところでございます。こういったものは学ぶ意欲を支え続ける仕組みだというふうに理解しております。全科目選択についても自分の伸ばしたい科目を伸ばしていくべき。実は全科目制といって取らなくていい訳ではなく、絶対に取れという強制的に受けさせる科目はあります。なぜ必修と呼ばないかというとその科目は落としてもいいからです。うちが必修を置かない理由は、大体必修科目を置くとその 1 単位を落とすか落とさないかで卒業できるかできないか、そういうのが出てきます。そうすると先生方は仕方がないなと甘い気持ちになります。そういう所で本気の授業ができるといううのがうちの考え方です。そんな関係では本気の授業ができるから必修科目はいらない。必ず受けろという科目はあるけども、必ず単位を取れという科目はない、そういう意味でございます。もう 1 つ教育講師ということで、企業の OB で早期退職された方とかを先生としてお迎えして導入教育をやってもらっています。中身は後の方で説明しますけれども、こういった取り組みをさせてもらっています。もう 1 ついきますとその気にさせるコンセプトということで、学会発表を相当奨励しております。留学もさせます、奨学金、特待生これはどこにでもあると思いますがやっています。これは学ぶ意欲を引き出す仕組みだということで理解しております。学会発表とかで経験させることでもっと勉強をしたくなるし、頑張ったら奨学金がもらえるのなら頑張ろうかとか、留学をしたら刺激を受けて帰ってくる。調べますと年間 200 人ぐらいが学会発表しているようです。このうち海外は 50 人ぐらいだそうです。だから年間海外での発表 50 件、国内での発表 150 件、うちの学生数が 1 学年 460 人ぐらいですから、結構な割合が発表しているのかなという気がしております。もう 1 ついきますと、今度は学びの習慣付け、これがアクティブラーニングの部分ですね。主体的な学びへの導入ということでアクティブラーニングの仕組みをやっています。うちはクオーターでやりながら毎回レポートを出してみたり、いつでもどこでも宿題を出して追い立てているわけでもないですが、理解を深めて頂くための仕組み

としてやらせていただいております。その中でスタディスクールズ、実は先ほどお話しました教育講師の方にお願いしている授業なのですが、これは徹底した少人数教育で実社会で必要な論理的に正確に読む、書く、話す力を高めるという科目です。ようは高校生の時の教室で、受身ではなく大学生としての、堀川の生徒がうちに来てもらうとこんなのはいらないようになりますので、先生是非堀川の生徒さんにうちに来てくださいと言ってほしいのですが、こういった授業を導入教育として 1 年生の 1 クオーターでやっています。レポートの書き方、プレゼンのやり方、その辺を企業で活躍されていた先生方から学んでいくと。こうやって見ると確かに人が育つ大学。この哲学でシステムを設計しているのかなと感じました。先ほどから同じことになりますが、確かに主体的に学んで人が育つ大学であったといえるのかなと思っています。僕が気がついたように、実は皆さんの大学でも同じような仕組みを持っていると思うのです。その仕組みをそう呼べば学習を支える仕組みになっていると思うのです。結構あるのではないか。今の最後のアクティブラーニングの部分などそうですし、留学だとかなんだとか、そういう考え方で、そういう見方で接してあげれば結構やっている大学がいっぱいあるのではないかと個人的に思っています。なぜかといったら昔から変わらないですから、教育というのは大事なのはきちんとした哲学と、オーバーかもしれません、きちんとした考え方の基でそれぞれの仕組みを持っているということです。付け焼刃でもっても全然役に立ちません。先ほど濱名先生がおっしゃっていましたつなぐ力ではないですが、いろんなことをやっても繋がらないといけないです。無理やりつなごうとしてもだめですが、1 つのしっかりと考え方さえあればそれぞれやっていることは繋がってくるということです。だからそういった哲学をしっかりと持つことが大切なのではないかと思います。これだけ偉そうに言いますが、それだけうちの大学の成果が上がっているのかという、私の本音ですが、成果としてはまずまずじゃないかなと考えています。就職の辺りも結構しっかりできているし、学生の満足度もある企業の調査によると全国の中でもトップクラスであるそうです。でも、正直ちょっと手を掛けすぎているのではないかと、先ほど言いましたが転ばぬ先の杖をいっぱい作りすぎて、その仕組みの中に無理やり当てはめているのでそうなっているだけじゃないのか。どこまで本当に必要なのか未だに疑問に思っています。課題もいっぱいあります。ここでもう終わりにします。時間が丁度ぐらいになってしまったので、最後にうちの理念を紹介させていただき

ます。シンプルです。『大学のあるべき姿を常に追求し世界一流的大学を目指す。』これがうちの理念です。大学のあるべき姿とは何か。この下に教育目標、研究目標、それから社会貢献の目標があるのですが、教育に関していえば大学のあるべき姿とはどんなものか。それは先ほどから何回も申し上げますが、プラトン、ソクラテスの時代から1927年に人間力を提唱した先生がいるように昔から普遍のものではないのか。だから我々は普通のようにその姿を追求しているだけのよう今は思っています。時間がちょっとオーバーしましたけれど、これで私のお話を終わりにさせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

高橋 福田部長、どうもありがとうございました。これで第1部のシンポジストの方々のご発表の方を終わらせていただきます。これから休憩時間に入ります。時間がちょっと押していますが、開始の方は予定通りの3時20分から開始したいと思っております。先ほどご説明をさせていただきましたが、お手元にある3枚の質問用紙の1枚を使って今お聞きになった3つの発表に対するご質問、ならびにご意見をこの休憩時間の間に書いていただきますようお願い申し上げます。そしてスタッフが當時、場内を周っていると思いますのでお渡していただけると非常に助かります。それをベースにしながら後半の最初のディスカッションを開きたいと思っています。それでは前半のシンポジウム第1部を終了させていただきます。

高橋 それでは後半の第2部を始めさせてもらいます。休憩時間の間に沢山のご意見、質問の方をいただきました。ご協力ありがとうございます。第2部ですが、先ほどの濱名先生の発表でループリックの具体的な表を提示できませんでした。その表が準備できましたので、前にそれを濱名先生にご説明していただいてから第2部のディスカッションに入らせていただきます。濱名先生よろしくお願いします。

濱名 申し訳ありません。うつかり抜けておりまして。これは詳しいのは文部科学省のウェブページで中教審に入って頂くと、答申の資料集のところに入っていますのでそこを探して頂ければと思うのですが、これがループリックで私どもの大学で、コモンループリックという教員が共通してリサーチ系の科目ではどれでもこのループリックを活用して頂く形でやっているのですが、縦にあるのが評価の観点です。テーマの立て方、これ

までに明らかにされた知見が活用できているか、教育研究方法上の分析の視点、分析がちゃんとできているか、結論が出ているか、こっちが低くてこっちが上なのですが、これは実はもっと先まで6段階まであるのですが、採点に使う場合には4年生なり、1年生、2年生同じ基準で使うと下級生にはろくな点数が付かないでの、一応低学年用は全体的にいうと中位ぐらいの評価を、比較的肯定的なニュアンスを与えたものに付け替えてています。それぞれの科目は、私の科目はライティングのループリックを使っているのですが、これをレポートの頭に貼り付けて、大体配点もできるのです。それぞれの観点を何点ずつ、例えば20点ずつでみて、この4つに点数配分。例えば0点から20点までとウエイト付けをしてレポートの頭に貼り付けて、例えばこと、こと、ことマルをつけて若干のコメントを書くか、あるいはそれに関する事をレポート本体に書いて返すというやり方を取ります。継続的に同じ評価の観点を下級生から上級生まで継続的に伸ばしていくというやり方で、ライティングは同時期に複数の科目等で使うと短期間で、何を気をつけないといけないのかが分かるのと、何ができるかができないからこの点数なのかと。あらかじめ示してありますので、これに基づいてやっていく。これがループリックの採点評価に使うためのループリックの原型だとお考え頂ければと思います。もちろんプログラム評価だと、あるいはプログラム全体の評価にも使えますし、科目的評価にもループリックは活用可能であると。イメージをお持ちでない方にとりましては、大変分かりにくいのでループリックを先に見て頂くようにしました。どうもありがとうございました。

高橋 壇上の明かりをつけてください。それではこれからフロアの皆様からいただきました質問用紙を元にそれぞれシンポジストの方々にご回答、あるいはご意見を伺っていきたいと思います。全体に関しての質問あるいはご指名をされていないご質問に関しては私の方で引き取らせて頂いて、最後にディスカッションを開きたいと思います。予想していた以上に多くご質問の方をいただきましたので、シンポジストの方には最初答えられるご質問にお答えしていただこうと思います。2回ラウンドを回す形で進行させていただきます。それでは最初に福田部長の方からよろしいですか。

福田 そしたら私の方で何点か頂いているところでお答えさせていただきたいと思います。結構環境整備が進んでいるという事例を紹介させていただきましたが、

今後更に強化していきたいものは何ですかというご質問をいただきました。実は強化より進化しないといけないと常々話をしています。というのは、入ってくる学生がその制度を導入した時と同質のものかどうかというと、当然学生達も変わっていますので、変わった学生に合わせてその枠組みを進化させるというのが大きなテーマとして1つあります。それから、学習関係についてはそれを支援する制度ができているのですが、それ以外、例えば課外活動であるとか、学習環境以外の整備を今後進めていきたいというふうに考えております。幾つかまとめていいですか。それから教育講師の制度についてご質問を頂いておりまして、例えば採用基準ですか、これは先生を採用いたしますので、先生と同じぐらいの判断基準で見させてもらっています。採用後の教員研修のお話をいただきましたが、実は本学には教員評価システムというものがありますし、教員評価が給与にも反映される。なかなか過激なことをやっているのですが、昇進、それから給与が上がる方もいれば下がる方もおられる。その教員評価制度の評価ポイントというのがそれこそFDとリンクしていくと、教育、研究、社会貢献、それぞれこういう観点で評価しますというのを出していますので、それぞれの先生ご自身でやっていただいくと。だからあまり教員研修というのは大学を挙げてはやっていない、こういった場に参加させてもらったり、先生方独自で動いておられるのが殆どです。それからこれも教育講師の先生関係なのですが、その先生方が自分の経験ばかりに偏ってしまわないかとご質問がありましたら、その先生方は自分の経験を教材として使って頂いて、例えば某大手電機メーカーから来て頂いた先生であれば、その時の経験を基に教える。教え方としましては教育講師の先生方で調整をしてもらいまして、それを深く考えて頂く、書物を読んで頂く、プレゼンをして頂くということであまり先生の経験に頼りすぎることがないように工夫はさせて頂いています。その先生方に他に問題点はありますかという質問ですが、あまり問題は感じていなく、むしろ相当力になっていまして、これは別の質問にあるのですが教育講師の先生方は企業経験もありますので、企業とのパイプもお持ちですし、企業が欲しい人材も分かりますので就職のバックアップもお手伝い頂いたりしています。それからいっぱい仕組みはありますが、その大学にもいろんな仕組みがあるようですが、それを学生がちゃんと利用してくれるかどうか。高知工科大学の学生はどうしてそれを利用しようと思うのかというご質問を頂いております。結構厳格に、厳しくやっていまして、別の質問ともリンクしますが退学

率も決して低いわけではありません。今はだいぶ改善されましたがアバウトなイメージでいくと入学してくる生徒から10パーセントは卒業までにいなくなります。10パーセントは4年間で卒業できません。入学者の8割が4年間で卒業する厳しさでやらせておりまして、そのために厳しくしているわけではないのですが、そういった部分で学生さん達のお互いで教え合うとか、勉強をせざるを得ないように追い込み過ぎているのかなと。それが転ばぬ先の杖に繋がるところなのかなと感じております。それから学生さんにそういった場合にどこまで責任を持たせますかという、先の質問ともリンクするのですが、退学などもあり全員卒業させるべきなのかどうかとも頂いているのですが、本学もできるだけみんな卒業させてあげたいと思っていますが、合う、合わないもありますし、無理なら逆に早めに進路変更を勧めています。そのためにチューターであったりだとか、アドバイザーだったり、担任であったり、それぞれ表現はそれぞれの学部学科で使い分けていますが、少人数の学生に先生が付いてずっとウォッチしていく。例えば履修登録を1つとっても、お前の目指しているところはこの科目を取るのではなく、こっちの科目を取った方がいいとアドバイスを含めてずっとやっていきます。そうするとその中で、結局進路変更をした方がいいのではないかということもありますし、学校に出てこなくなったらその先生が自宅に電話して話をしたり、お父さんお母さんにも連絡を取らせて頂いて相談をさせて頂いたりだとか、そういうことをしています。最終的には学生本人が決めることで間違いないのですが、しんどいのだったら別の道を考えるここまでやっています。ですからちょっとやり過ぎなのかなと。どちらかというと、転ばぬ先の杖のように失敗させないぐらいの手厚さがあるのかなと、個人的には自分の学生時代と比べて思っていまして、だからやり過ぎではないかなと。学生時代ではないと失敗できないことを失敗させてやることも必要なのかなと最近先生方とお話をさせて頂くところであります。それから最後に1点、学生の海外への学会参加のところでの頂いた質問ですが、学会ですので世界中どこでも持ち回りでありますので、どこということなく全世界中行って発表しています。アフリカであったり、ロシアであったり、アメリカであったり、中国であったりどこでも行きます。期間というのも結局はその学会の期間出張していますので、学生も学会に出張するという感覚で行っています。それに関わる経費の問題ですが、1つは先生の研究費の中でやってくださいというのが1つ。それからそうもいっていられない場合には旅費の上限を5万円と決めまして、こ

の間決まったのですが、その旅費の5万円であれば大学から出します。大学から学生に出張旅費5万円を出して行ってもらうと。行ったらホテルだとか手当が付きますので、旅費の部分だけは5万円でやってできるだけ行けと。どんどん世界を見てくるようにというような指導をさせて頂いています。大体こんなところが質問でした。

高橋 福田部長、ありがとうございます。それでは引き続きまして荒瀬先生よろしくお願ひします。

荒瀬 先ほどは大変早口で失礼しました。いただきましたご質問は大きく4つのグループになるのかなと思っています。

1つは、学校を変えていく時に大変だったんだろうけど、具体的にはどういったステップを踏んでいったのかというご質問です。実際には変わったステップではなくて、こういう学校をつくろうと考えて、そのためにはどんなことが必要なのかを一つ一つ考えて、なんと申し上げたらいいか、ゼロベースという言葉がありますけれども、今からつくり上げるにはどんな学校がいいのかという意見を出し合ってやってきました。変わったステップではありませんが、これがなかなか大変でして、聞いていますと、多くの学校はそこへ踏み切れない。やるといろいろなぶつかりが生じます。ぶつかることができるたというのはせっかくのチャンスなのに、ぶつかることが嫌でやめてしまうケースが多いのかなと思います。高校の場合は学校改革だと高校改革だとと言われていて、改革という言葉に疲れ果てているのですが、改革というようなことをあまり考えないで、要はどういう学校をつくるかということを考えてぶつかりながら、それをなんとか乗り越えつつやってきたわけです。具体的な話をすれば長くなりますので今日はいたしませんが。

加えて申しますと、これは京都市教育委員会が考えているだけでは絶対できません。学校の中から変えていくという思いがないと絶対にできない。でも、学校だけでもできない。学校と教育委員会が一緒になってやっていったというのが一番大きい。考えてきた思い通りの学校がまだまだできたとは言えませんが、それでもなんとか動いてくることができた理由かなと思っています。

2つめには、いわゆる進学校なので事情が他の学校とは違うのではないかというご指摘をいただいております。確かに違うと思います。しかし、実は学校によってそれぞれ違うと思います。つまり、進学校だからできる、そうでないからできないということとは違うと思っています。

どういう学校をつくるのかはそれぞれの学校に目的があってどう目標設定をしてやっていくかだと思います。同じことをそのままやるかやらないかというと、例えばSSHの指定を受けないとできないこともありますので、条件的には難しいところもありますが、しかし生徒が自分で学びたいという気持ちを持つのは、これは偏差値で決まるのではありません。偏差値によって決まると思っている方が世の中には多いだけだと思います。やってみたら分かるはずだと私たちは思っています。少し失礼な言い方ですが。おやりにならない方ほど違うと思っていて、おたくの学校でないとできないとおっしゃる。おやりになってすぐにやめた方も。やり続けるかどうかのことだけだと思います。

京都市で、学校名は申し上げませんが就学援助率のとても高い、つまり家庭の経済状況の大変厳しい子どもの多い学校があります。その中学校の話です。堀川高校はSSH本体プラス、コアSSHという普及と共同研究に関する研究指定を受けていまして、いろいろな小学校や中学校にポスター発表用のパネルを買うお金ですか、模造紙やポスカとかを買うお金ですか、公立の小中学校はそういうお金が潤沢にありませんので、そういうお金をコアSSHからお渡しして共同研究をしているのですが、先ほど申し上げた就学援助率の高い中学校で、問題行動がとっても多かった学校なんですが、この共同研究を始めました。大変だったと思います。ところが、妙な言い方ですが、その中学校の先生は、全員という訳ではありませんが、相当数の先生が勘違いをなさったのです。いいことをすればきっと生徒たちは伸びるだろうと。多くの学校においては、とても残念なことです、地域によって、家庭の状況によって、学力が決まるというように固定的に見てしまつて、決まっているからうちでやつてもダメなのだというふうに判断しています。それが正しい判断だというように、本当に残念なのですが、これが私の勘違いならよいのですが、共有されているような、常識であるような、そんな感じがあるのです。でも、その中学校の先生方は何人かが、そうは思わず、常識を乗り越えるような、すてきな勘違いをなさつて始めたのです。そうしたら、全国学力状況調査の結果も徐々に上がっていって、授業はというと、普通になんの騒ぎもなく行われるようになっていって、学校は変わってきました。その過程では大変ドラマチックな話もあるのですが、時間の関係もありますので。

それで、こういうお話をしても、そこにはそこの事情があつてできたのだとおっしゃるので、多くの方が。堀川のことも同じです。偏差値が高い学校だからできる

のではないですかという方に、そうではないとお話ししたら、それは違うでしょとおっしゃるのです。お断りしておきますが、そう言う方に悪気があるのではありません。敢えて言えば、ご存じないから、ご経験がないからです。

要はやるかやらないかだけなのです。物事はそれだけだと思います。私は、そういうように考える生徒を育てたいと思っています。やるかやらないかで、やつたらなんとかできるはずなのだと思い続ける生徒を育てたいと思っています。何が一番いい状態なのかを考えていたい、当然そこには学生あれ、生徒あれ、また、学校あれ、状況がそれぞれ違いますので、その違いを十分に踏まえた上で、どうしていくのかを考える。先ほど申しましたように堀川高校というのは京都府内全域から生徒の集まる探究科という、これが上澄みだけを取っていると言われるのですが、実は学力には幅がありますし、変わった子もいますし、学習障害ですか発達障害の生徒も沢山いますが、そういった生徒に対してどうしていくのかということを、やっても無理とは思わず、なんとかしたい、なんとなるんじやないかと考えて取り組む。そうしてきたわけです。初等中等教育段階では生徒数が少ないので、個々にどういう対応をしていったらいいのかが分かりやすいです。大学とは異なって。だから初等中等教育の責任だと申し上げたのはその部分でありまして、私たちはもう一度個々の生徒をどう伸ばしていくのか、彼らには力が元々ありますから、それに本人も周りも気づいていないだけですから、はじめに周りが考えてやっていたらそれが開いていくわけです。そこで本人も気づいてきて、だんだん面白くなっているって、こちらにとってもそれほど面白いことはないわけです。こういうことは、それこそソクラテスやプラトンの時代から、昔から分かっている。そんなことをやっているだけです。

それから3つめのグループです。SSHの高校から学生が来ているのだけれども、ゼミとか少人数での講座の少ない1年生時、2年生時の時は戸惑いもあるようだといったご指摘。今後いろんなことをやってきた生徒が入学してから大学はどうしていけばいいのかとか。堀川高校では、そんなに立派なものではありませんが論文を書かせているのですが、そういった取り組みの上で大学にはどんな学びを期待しているのかといった、大学に入ってからのことをお書きいただいている。堀川高校だけの観点で申しますと、大学に入ったらその大学の学びがあるので、そこで謙虚にしっかりと学んでいたらいいと単純に思っています。

私たちが大学に期待することはむしろ入学試験で、

もっとバリエーションを広げていただけないかと思います。例えば、センター試験の5教科7科目で高校生の学習歴が見られるのか、あるいは国公立の個別試験の内容や私学の入試の現状を含め、議論がもっと大学の中で大きく巻き起こるべきだと思います。ちなみに私は東大の秋入学は大賛成です。なぜかと申しますと、大学に何のためにいくのかを考える時間を入学生に等しく与えるというのは、大きな入試改革だと思うからです。

大学入試のあり方を、高校での学習状況を正確に見ていただいた上でどのようにしていただくか。高等学校としては大変関心が高いものがあります。動きは少しつつですがあるのだろうとは思います。たとえば、国立大学医学部の入試で一部AO入試をなさっているところがあります。この入試は、講義を聴いて受験生がどのように考えたのかについて口頭試問的にやっていく。その中で、医学部で学ぶ資質があるのかどうかを判定していくという、とても時間のかかる入試です。高等学校での学習の取り組みをプレゼンテーションしてそれに基づいて合否を判定されるといったような大学もあります。そういう意味での多様な入試について、ぜひお考えいただきたいと思います。ちょっと嫌なことを申し上げますが、入学試験が大きな負担であるというのは我々も経験から分かっているつもりですが、入試のあり方が、内容や形態も含めて、その大学に入ろうとする学生へのメッセージですから、それによって高校生が受験や入学に向けてどのような準備をするのかということに大きな影響を持つのですから、ぜひお考えいただきたいと思っています。話がちょっとずれてしまいました。

さて、4つめのグループは、受験に関係ないことを沢山やっていて不満が出ないかということとか、あるいは高校の教員は私が先ほど申し上げたようなことを受け入れないのではないかといったご質問です。就職や入試のことばかりに目がいっていて、入れればいいみたいな感覚でなかなか変わらないのではないかということですね。あるいは、入ってきた学生と話したら親が行けと言つたから来たとか。致し方ない状況があるとは思いますが、高校教育に確かに課題があるのは間違ひありません。しかし、高等学校の教員が教育について無関心であるということは全くありません。先ほど申しましたように、多くの教員が現状を改善したいと願っています。

話せば分かると言いますか、高大の連携の観点、一人の生徒が連続的に成長していくという観点から、時間のかかることですからご無理を申し上げにくいのですが、是非お話しいただければと思います。随分以前、コンソーシアム京都の高大連携の会議で、ある大学の先

生が、経済学部に入ってくるのに数学を勉強していないとおっしゃったことがあります。だから、指定校推薦で入ってくる生徒を土日に呼んで数学を教えている。しかし、それに対して高等学校は協力的ではないと。調べてみたら、その大学の経済学部は数学を選択しなくとも入れるのです。それで、数学を必修にしてくださいとお願ひしました。数学の入試をやらないで数学ができるといふのは先生の大学のせいではないですかと。周りの方は半分喧嘩のように思われたかもしれません、そんな話になつたのです。が、高校もよくない。入試がどうであれ高校までに身に付けておくべきことは、高校の責任できつちりとしておく必要があります。まあそういうやり取りを通してお互いの考えが分かっていくのですね。

中高接続プロジェクトのご紹介をしたときに、中学校の校長と高等学校の校長の言葉がなかなか通じないということを申し上げましたが、私たちは自分の属している所は分かっているのですが、そうでない所は分からぬわけで、そうでない所の人との関わりを持つことでこそ見えるものがあると思います。その意味では非高校の教員に話しかけていただきたいのです。高校の教員同士でも通じにくいことは多くありますが、だから話し合わないのではいつまでたっても変わりません。立場や考え方の違うことも、話し合うということによって理解を深めていけることになります。

はじめの、受験勉強に関する時間が減ることに対する不満や苦情はありますかというご質問ですが、聞いたことはありません。どうしてかというと受かるからです。私たちは、堀川でやっていることは大学入学後に必要なだけでなく、合格するためにも必要だと本当に信じています。それを生徒や保護者に日常的に伝えるのですが、そもそも大学に合格するためには自分自身が本当にそこに行きたいと思っていなければなりませんから、そういう生徒にするためには、堀川の探究や行事は重要だし効果的だと思います。

変な言い方かもしれません、私たちが考えたのは、教員や親が、受験受験と騒ぎ立てないでも、自分で勉強して大学に行って、また勉強を続けて、自分自身が成長して幸せになって、この社会全体がよくなっていくための力を發揮できるような、そんな生徒はどうしたら育てられるかということです。そのためには、自分で考えて、自分で気づいて、自分で工夫して、倒れそうになつてもまた立ち上がるというような、そんな生徒に育てよう、と非常に簡単な結論に至りました。ではそのためにはどうしたらよいのかというと、あれこれ用意した先回りの教育ではなく、生徒自身が経験的に学んでいくような、

風にもさらされて痛い目にもあうような、でもしっかりと守っているという、そういうプログラムをつくればいいのではないかと考えて、あれこれと始めたわけです。

大学に行って本当に学生が勉強しないと驚いている卒業生が結構います。とある国立大学の文学部に行つた卒業生が、隣にいた学生に、僕は哲学がやりたくてここに入ったけど君はと尋ねたら、本当は法学部に入りたかったけど偏差値で文学部に行けと言われたから来たので別にやりたいことはないと言つたそうです。それを聞いて、そんなことがあるんですねと卒業生が驚いていましたが、そういうことが残念ながら多くあるようです。これは高等学校の責任ですね。

どうしたら大学に受かるのかと考えた時に、私たちは探究基礎をやつたら受かると本気で答えます。現にそうですし、また入つてからも、探究基礎をやっていたからレポートを書いたり、ディスカッションをしたりとかの場面で困らないと卒業生たちも言っています。やるべき時にやるべきことをやらせておかないと、よい実りを生まれないと思っています。

長くてまとまりのない答えになってしまいました。失礼しました。

高橋 荒瀬先生ありがとうございました。引き続き濱名先生お願いいたします。かなりの量がきていますが。

濱名 基本的なところですね。能動的な学びと主体的な学びの違いについて3件ぐらいご質問がきていまして、中教審は何故これを分けるのか。これは中教審ではありません。私とか川嶋 太津夫が分けて考えているのですが、英語で言えば同じではないのかと。アクティブラーニングというのはHIP、ハイ・インパクト・プラクティスにも出てきましたが、学習方法、教授方法として考えられているアクティブラーニングというのは組織的に導入することは可能だし、それを皆様方がご自分の授業の中でやろうと思えば可能なわけです。ところが主体的な学びというのは学習者が主体になってボランタリーな意欲を持って取り組んでくれるかどうかで、質問の中には主体的であるが能動的でない学びの例というのと、主体的ではないが能動的な学びについてお聞きになられているのですが、主体的で能動的でない学びは一生懸命自分の好きな本を読む。哲学書を読んで集中するというのはこれは主体的な学びだと思います。能動的な学びはグループワークをやらされるのです。あるいはグループの中で課題に課されているのでグループに参画せざるを得ない。という場合もあるわけです。しか

しながら主体的な学びが自然に沸いてくるかというと逆三丁目の夕日症候群ですからきっかけがいる。堀川の奇跡の話もそうですし、今までバーチャルなこと、自分の部屋の中でネット環境の中で情報を集めて疑似体験ができる人たちにとっては、五感を全部使った経験が得られるようなアクティブラーニングであり、コアカリキュラムであり、そうしたものが効果的で、能動的な学習は必要条件ではないのですがいい方法論である。アプローチである。しかし絶対ではない。というのが私が申し上げたかったところです。次に、共学マネジメントに関する質問が一番多いですね。例えば教員がアクティブになる動機付けとか、科目間連携、教員間連携で学内はどういった学内の仕組みを取っているのかとか主体的な学びをさせるためには強制的なシステムを作らないといけないのかとか、教員の研修に特定の教員しか出てこない、だから大学教員がアクティブラーニング型に切り替えられない、どうしたらいいのか。こういったことがあるのですね。これはアクティブラーニングに対する動機付けをやっていこうとすると、私は私学事業団の人材バンクに登録されたこともあって、結構経営的に苦しい大学に今年もお呼びがあって伺うのですが、実はそういった大学の方がやりやすいのです。この大学はやりにくいです、はっきり言って。放っておいてもやってくる大学はあまりそういう認識の共有は持つてもらえないですが、学生が来なくなっている学部、学科の方がどうして自分のところが上手くいっていないと疑問を持っている大学の方が、まず認識の共有をしてもらうことなのです。例えば立地条件が悪いとか、偏差値が低いとかの話が始まつたら大体私が申し上げるのは答えはコンサルテーションのお手伝いをしても答えがあるわけじゃない。答えはその大学の中にしかない。私は健康診断と言っているのですが、自分のところの上手くいっているところ、上手くいっていないところを先生方やあるいは職員の方と一緒にになって考えて認識の共有をしていかないと、FDが義務化されたから出なさいではまず効果はないと思います。出やすくするためには、アメリカのFDなどは非常に現金ですので、出たらお金を出すのです。日当が出るのです。私たちの大学でもやっていますがFDの日はご飯を出すのです、お菓子も出すのです。要するにFDはさせられている不愉快ではなくて、普段なされている会議とはちょっと違うというところと、大学によってはインセンティブ。それを評価の中に加えていかれるとか、それは各大学のお考えだと思いますが、まずは7割、8割の教員が出てくる状況を作り出さないとなかなか動き始めない。つまり認識の共有がないと、目的の共有

もなければ現状の認識の共有がなければ、方法論やアクセスメントなどはできるわけがない。そこは一番大きなところで教員の動機付けは私たちの大学では教員の評価制度に若干入れていますので、組織目標に適った形で先生方が立てられた目標の達成度が高ければ、ご自分のところへ返ってくると。それから科目間連携、教員間連携は、私どもは基本的には学科をユニットに考えてもらうようにしています。ですからラーニングコミュニティーを作ってくれとか、科目をドッキングさせてくれとか、週複数回の授業は簡単にできないのです。昔セメスター制の時にちよん切ったものを今度は糊でくっつけて下さいということなのです。週1回の科目を2つくつけてやるところから始めればできるのです。それがしにくいこともあります。私の仮想敵は厚生労働省なのです。厚生労働省は大変ややこしいところで、1つは教室外学習が視野にないことです。大体学習時間、授業時間しかないので、教室外学習が視野にない。もう1つは専門集団も官僚もよく似ているのですが、普通こういった改革をしていくと、高度化していくと専門職は高度化していくとみんなやりたがるのが足し算なのです。科目の足し算。引き算を知らない。括弧でくくることも知らない。だからカリキュラムが肥大化する。その場合は科目間連携しかない。一番良いのはくっつけていって2人で持った方が楽ですよといった方が良いのですね。休校することもないし、課題も出し易くなるし、チームでもできるというようなことをいうのですが、やっぱり1年、2年学科のどこからやっていけばいいのか、周辺ではなく中核となる必修科目をやった方がいい。コアの科目が連結した方が効果が高くなるというインセンティブなり、誘導はしています。最後は説得ですね。説得してもなかなか。厳しくなると、条件が悪くなになると危機感が出てくるのが常です。状況認識の共有とインセンティブも含めて仕組みを作っていくのが基本的に共学マネジメントにとって必要だと思います。私どものところはトップ、学長や担当副学長とか合わせて、中間管理職とかどういう職種の方がやっているのかとあるのですが、うちは別にFDデベロッパーは養成していません。IRerは学内に作っていますが、後は高等教育開発研究センターという部局があって、そこが中心になってやっています。その開発センターの下には教育開発部門、初年次教育部門、キャリア教育部門という3部門ありますと、全部のことを1つではできないので、うちはその専従の教員ではありませんので、それぞれに委員会があつて各パート部分をやつたものを統合していくと。私たちのIRは同志社とか北大のものと違いますので、個人データを蓄

積していく学生支援型IR、小規模校ならではのIRをやっていますので、学生の個人データから考えてより有効な情報を提供するというやり方をとっています。後はカリキュラム整備を全学的に進める過程の中で、うちの路線に沿う教員を、教員募集の時に組み込んでいるのかとご質問はありますが、別にそんなことはしていませんが模擬授業は必ずします。模擬授業をやってアクティブラーニングに全く馴染まない人であるとか、我々の大学は教授能力が高いのでそういうところを見ております。最終候補で私のところにくる頃には、業績や面接などはそれ以前にしますが模擬授業を審査員の前でやって、審査員が学生の目線で見て評価をして候補があがってくるというやり方をしています。教養教育と専門教育の組織化の難しさ、これはおっしゃる通りで、大きな問題は教員組織と学生の教育組織一緒になって、今日は金沢大学さん来られていますが、最初は私も何故一緒になってやっているのか分からなかったのですが、やっぱり科目が学科の所有物であったり教員の所有物であったりすることが非常に大きな問題で、特に学科の持ち物だから専門教育には関心があるけど、教養教育には関心がないと、全学のディプロマポリシーを作れと書いてあるのです。よく見ると、全学のディプロマポリシーとは書いていないのですが、全学としての単位授与の方針に基づくと、大学の大綱の中に出てくるのですね。これは私が強く言ってきた学長のリーダーシップを、学長が代わると選挙で勝った学長は前任が学長の否定する、これは日本の習いありますから、そうするより錦の御旗を1本作るのが全学ディプロマポリシーなのです。その中にこの教養教育とかをどうするのかを組み込みをしていかないといけない。ナンバリングとはそういうことをする上で有効で、大学基準協会の鈴木先生、前のICUの学長ですが、鈴木先生は毎回ナンバリングのことを言わっていましたが、最近私も自分の大学でナンバリングを始めてなるほどと。これならできるなど。ちなみに東京の大きな大学はですね、同じ学部の中で同じ科目的授業を取らざる大学があります。かなり有名な大学です。大きな大学に行っても蛸壺型の教員組織がかなりあだになっている。それを今後どうするかはガバナンス、共学マネジメントというのが引き続き7期の中教審でも話題になるのではないかと思っています。ちなみにベンチマークを各科目に分散させるのはどういう意識決定ですか。実は私の科目は私のつけたい意識目標ではないものをつけられたのです。共通教育開発センターにある程度の権限を持たせているので、一通りの教養教育をベンチマークでカバーできるように決め

られるので押し付けられるのです。それでもみんなしようとがないということで、全権を委任しようと言っていますので学長としてのそれに対して異議申し立てはできないというふうにやっております。権限の移譲とその仕組みを何故やるのかが重要だと思います。どうしましょう、まだありますが、ここで一旦切れますが。

高橋 それでは私の方から全員のシンポジストの方々へのご質問ということで、2点、質問を投げさせていただきます。まずは、「主体的」という言葉に関する質問です。この言葉は、今までのお話の中で何回も出てきている言葉だと思います。また、今回のシンポジウムのテーマのキーワードでもあります。質問は、「主体的」という言葉が非常に気にかかるフロアの参加者の方からいただきました。凄く哲学的な質問になると思うのですが、「主体性の本質とは何か?」についてシンポジストの方々に一言ずつコメントをいただきたいと思います。

濱名 私は知的好奇心と自分の生活とのレリバンス。関わりだと思います。つまり自分が関係のあることだと学生が認識することの2点だと思います。

荒瀬 主体性の本質とは何かということについては難しくて答えられませんが、堀川高校では「すべては君の『知りたい』から始まる」と高校生にも中学生にも発信しています。自分の「知りたい」ということに気づくということが主体性の始まりだと思います。

福田 同じですね。私はよく企業の方ともお話をさせてもらうのですが、気付き。興味関心。気付いた後に興味関心を持って調べて結果的に上手くいった、何かを知った時の気持ち。これが最初だとその方は言われていて、個人の面白さ、喜び、うれしさ、感動あたりのことなのかなとその方はおっしゃっていましたし、私もそう感じました。

高橋 荒瀬先生のご発表の中で「たのしんどい」という言葉が非常に面白いと思いました、先ほどの休憩時間に荒瀬先生とその言葉についてお話をしておりました。結局、この言葉は、「しんどい」作業の中の「楽しい」要素を強調した言葉だと思います。私はこの「楽しい」要素が主体的な側面とも深く関わっているのではないかと思います。「しんどさ」を乗り越えた先にある「楽しさ」とは、「しんどさ」を乗り越えたからこそ味わえる格別のフィーリングだと思います。ただ「しんどい」のではなく、

ただ「楽しい」のでもない。「しいどさ」を乗り越えて得られる「楽しさ」を味わえる経験が必要なのかなと思います。大変抽象的な言い方で申し訳ございません。

続きましてシンポジストの皆さん全員への、もうひとつの質問です。「教育の哲学をどう作るのか、あるいは教育の理念をどう作るのか」という質問を頂いています。これはおそらく話のコンテキストでいいますと、高知工科大学の福田部長がお話になった時に、大切なのは哲学の基でその仕組みを作り上げていくという話をしていただいたと思います。その中で「我々は仕組みを作り上げているのだが、その仕組みが上手くかみ合っていない」という意識を持った方がいると思います。先ほどの理念の共有というテーマにも関わってくると思うのですが、一見自分たちはしっかりと改善に向けて仕組みづくりをしているのだが、別なグループから見ると改悪として判断されるという状況が頻繁に生まれるのではないかと思います。そのような状況下で重要なのが、福田部長がサラッといいましたが「哲学がある」ということ、哲学を前提することだと思います。それが前提にあると、全然違ってくると思うのです。もし哲学がなかった時にどうやって作り上げていくのか、かなり重要な問題だと思いますがその辺はどうでしょうか。

濱名 大変難しいのですが、哲学理念は多くの大学は何かしらお持ちだと思うのです。ただしそれを現代の文脈の中でどういうふうに可視化していくかで、私は哲学もさることながら目標のレベルまでに落とさないといけないのですね。目標というのはディプロマポリシーですかあるいはベンチマークですか、もともと教育目標をキャンドゥー型、学生たちから見て、アイキャンドゥー型に最終的に置き換えたのですが、その置き換えたプロセスの中で哲学が機能する場合もあるでしょうし、現状分析の結果が活用されるのもあるでしょうし、あるいは非常に優れたリーダーのディクテーションが影響を及ぼすこともあるだろう。先ほど全学ディプロマポリシーというのを申し上げたのはそういうことです。今の時代は少なくとも質保証に対して質保証というはある程度具体的に自分たちが立てた目標が実行できているかどうかの説明責任を各機関が負うということなので、哲学に基づいて、哲学がなかったら僕は恥じることだとは思わないのですが、それをきちんと自分たちが、教職員も社会と共有できる形に可視化するという、できればキャンドゥー型に再構築されるタイミングにきてているのではと思います。

荒瀬 私学の場合は建学の精神というものがありますが、公立の場合はそういう建学の精神はないわけです。法律などで設置基準が決まっているということですね。ただ、多くの学校に校訓というのがありますと、内緒ですが、カビの生えたような言葉がいっぱい並んでいるのですが、そこにはきっとカビの生えていない活き活きとしていた時代が必ずあったわけとして、それをいかにして今、濱名先生もおっしゃいましたが学校としての目標や活動に据えていくのか。つまり校訓の読み解きというのが必要だと思うのです。

熊本県立熊本高校という歴史のある高校がありまして、「くまたか」と呼ばれている所ですが、「士君子精神」というのが伝統のようです。ですが「士君子精神」と言っているだけでは意味が共有できないので、「士君子精神」とは何かということを10年に1度ぐらい教職員が議論して現代語訳されるようです。そういう、言葉に対するこだわりが重要だと思います。

申し上げました構造化にしてもメタ認知にしても、また、批判的思考力とかいっても、それらはすべて言葉によって認識をしているわけで、言葉が大事です。漠然としました言葉をどう解釈して具体化するか。堀川高校の場合、「立志、勉励、自主、友愛」という4つの言葉を組み合わせた校訓があるのですが、学校を変えようとした際に、これらの言葉をどのように読み解くのかを相当真剣に考えました。今の学校のパンフレットには読み解いた内容を書いています。

先ほどのご質問と関わることですが、私たちがどんな学校をつくるかというスタートの時には、「よりよい教育活動の展開」という、非常に意味の広い言葉の共有から始めました。「よりよい教育活動の展開」をする学校、これは誰も反対をしないのです。意味が分からないわけではなくて、みんな自分のよいようにとらえる。最初は厳密な意味が示されないので、じゃあそこに厳密さをどう与えていくのかということが、具体的に学校を変えていくこと、具体的に日々の取り組みを進めていくことに重なっていました。取り組みがより進んでいけばより具体的な言葉に転換されていく。具体的な言葉に転換できないのは、取り組みが進んでいないからです。

そういうしているうちに別の言葉、たとえば面白い学校をつくろうとか。ならば、面白い学校とよい学校とはどう違うのかとか。また、堀川高校では「自立する18歳」を育てる最高目標としているのですが、自立するとはどういう意味かを教員間で、あるいは生徒の間で議論をする。探究基礎の授業の最初に、校長が入学式で「君たちは自立する18歳をめざすのだ」と言った

が、では自立とは何か考えなさいというテーマが出されたりする。「自立する」と「自立した」についてもこだわる。そういう言葉が行き交っているのが、それが一番大事な哲学なのではないかと思つております。

高橋 ありがとうございます。福田部長はいかがでしょうか。

福田 哲学が大事だと言った私ですが、我々が大学に勤務した時にはその哲学があったので1から作ったということはないのですが、今もお話にありましたように私学なら当然開学の理念があると思いますのでそこを読めばあると思います。それをまさに今のみんなが共有できる言葉に置き換えていくのがすべてだと思います。実は前任校で1回やったことがあります。その時は学生募集大変でなんとかしないといけない、どうやって学生に訴えかけるのかを徹底的に議論して、先生方にも入っていただいて、それから言葉のプロにも入っていただいてやったのですが、その時にできた言葉が『大丈夫』という言葉だったのです。なんのことか分からないです。でも今の子に安心感を与えようとしてパンフレットを作ろうとして途中でトップに怒られたのですが、その時にやったのがやはり原点に戻ることでした。開学の理念であり、次の2代目が言っていた言葉、書いていた文章を読んで、紐解いてみんなで議論をしていくとそここの共通の中に君たちをしっかりと育てるのだということがずっと出てくるのです。難しい言葉もあったのですが、それをまとめると大丈夫という言葉になったのですが、そもそも我々の大学がなぜあるのかを戻って考えてやっていけば割と難しいことではないのかなと。そもそも目的がなくて大学を作った大学はないと思うのですが、若干国立大学は国の政策でということがあるかもしれないですが、ずっと大事にしている言葉を持っているはずなので、それを今ふうに読み解いていくのかなと思います。なんでもそうなのですが、うちが最近よく理事長に怒られるのがそもそも理念と違うと怒られるのです。うちの先生方よく怒られるのです。君たちがやろうとしていることは今しか見ていない。そもそもなぜこれを私が入れたと思うと言われるので。そもそもを知らないから進めていくうちに別の方向に行っているのだと。やっぱり原点は何かを突き詰めていくと自然とそこにはあると考えます。

高橋 シンポジストの方々、どうもありがとうございました。先ほどの休憩時間に提出していただいた全ての質問に対して答え切れてはおりませんが、時間もかなり

過ぎており、ディスカッション①はここで終了させていただきます。引き続きまして、ディスカッション②に移らせていただきます。

今回のシンポジウムでは、最初に申しました通り、フロアの皆様も聞いているだけではなくいろんな言葉を介して、議論したり、あるいはあーでもない、こーでもないというようなことを話して頂いて、そこから出てくる意見、あるいは質問というものを重視したいと思っております。この後の展開なのですが、まずはバトンの方をフロアの皆様にいったん預けさせていただきたいと思います。10分間程度2、3人の方にグループになっていただいて、そこでお話のほうを是非していただきたいかなと思います。特に私の方から念頭に入れて欲しいような指針等々はありません。ただ今までの意見を聞きながら自分が思ったことを、考えたことを話していただきて、何らかの形にしていくことが非常に重要ではないかなと思います。その時間を設けさせていただきまして、その中から出てきた意見をピックアップし、まだ回答していない質問もございますので、それも合わせて後半の残りの時間でシンポジストの方々との意見交換を行いたいと思っています。

これから10分間、周りの方々とお話ををしていただきて、もし意見がまとまり、ご質問等々がまとまったグループがありましたらお手元の質問用紙に書いていただき直接スタッフの方に渡して頂ければと思います。ご協力の程をお願い申し上げます。5分間経ちましたらお知らせいたしますので、まず皆様でのディスカッションの方をお願いいたします。

後、残りが1分ぐらいなのですが、大変話が盛り上がりつつあるところ恐縮ですが、その場で出たご意見、あるいはご質問の方を大変申し訳ないのですが、どなたか1名の方が質問用紙に書いていただきスタッフの方に渡していただけますと非常に助かります。

そろそろトークの方は終えようと思うのですが質問用紙が出来るグループがありましたら出して頂けると話題提供でありがたいです。

それではディスカッションの方を始めさせていただきたいと思います。6通ほどの質問用紙が出てまいりました。それでは今出てきたものを振り分けさせていただきます。先に、先ほど濱名先生に宛てたご質問の方からお答えして頂いて、その後に今のシートの方に移りたいと思います。

濱名 まずループリックについて。すべての科目でループリックを作成することが可能かということで、参考文

献もお尋ねになっているのですが、今リストが手元にないでお答えできませんが、ループリックはバリューループリックを見ていただきますと基本的にはスキルベースのモノが多いのです。つまり科目的ループリックを作る時には複数の基本となるループリックを組み合わせで作っていくことも可能なのです。すべての科目でのループリックは私たちの大学でもまだ、数ループリックを使っている状態なのでこれは膨大な作業ですが、使い方としてアメリカの大学でバリューループリックを使っている所はそういう活用をしていますし、全学共通のループリックの使い方であれば自分のディシプリン分野にカスタマイズして使っている場合もありますので、あくまで大学としてどの範囲までやっていくか。それと先ほども申しましたが、大学としての到達目標の組織的な評価にも活用できますし、学育プログラムレベルでも使いますし、それぞれの科目が目標達成しているかという形でも援用していくこともできますし、最終的には学生の評価にもデフォルメしていくべきが使えることができるということです。その問題を例えば中教審に私たちがアップしたものを混ぜて4月からお使いになられる大学があると聞いたのですが、あまり焦らずにお使いになって頂いた方がいいと思います。というのはやはりご自分の大学の文脈に合わせていくことが必要でございますし、AACUのウェブサイトを見て頂けますとバリューループリックが見て頂けます。ただし書いてあるのはこれを成績評価にダイレクトに使うなと書いてあります。ちなみにAACUでこのバリューループリックを作る中心人物はテリル・ローズという方がいるのですが、彼は6月の終わりから7月の頭に私たちの大学関連授業で日本に連れてくることになっていますので、内1日は公開の研究会を開かせていただきますのでそれを見て頂ければ大変ありがたいかなと思います。尼崎でたぶんやると思いますので、情報としてご活用して頂ければと思います。問題はワーディングしていく時の英語はそのまま直訳はできませんし、間が均等になっているかとか採点に落としていくと、私たちも使っていると、1回使ったものは使い続けられないです。やはり1年2年使って修正をしていかないと作った時は等間隔で作ったつもりが、使いにくいとかあります。私たちの大学は到達目標のクイズベンチマーク大項目5項目のものも、6年前2006年に作っていますが今見直しをしています。部分修正をしています。ただ作り直す時には、アイキャン何々のフレーズに全てなっています。私は何なにができるというふうにしないとループリックはなかなか活用しにくい。それと観点と基準、観点までは作るけれどもクライテリアを作ら

れない場合は主観的になってしまいますし、それを作ったからといってそのまま使えるわけでもないですし、これはいろいろとワークショップのやり方等々あるのですが、先生方も辛い先生、甘い先生がいるのです。同じ基準を作つても、ばらつきがあるのでそのあたりはご注意を頂いた方がいいと思います。ですからこの数値化というのは先ほどの記述化で表現していくということです。仕組みの具体例は、バリューループリックは基本的に0～3の4段階、うちのは6段階でやっていますが、その4段階でいくものを継続に同じ枠組みのループリックを使っていくと学年が進むとともにそのスキルがレベルアップしていく仕組みを取っていく。これがループリックを使って組織的な教育やアセスメントを持たせていくことでございますので、その使い方は私たちもが今開発しようとしているのは教室外活動です。インターンシップとかサービスラーニングのループリックの開発を今やっているところでございますので、去年の9月から大学関連授業に採択していただきまして私たちもが代表校でありますので、ある程度安定した状態のものができた段階で公表させて頂くと。不安定な状態でお出しするのは無責任でございますのでそういうふうに考えております。後、アクティブラーニングのチームワークの質の問題。初年次から上級生についての段階的な向上についてというお尋ねですが、それはだからループリックを使っていくのです。ループリックを使って低年次にできないことができていくようになるという形で、ただ日本の場合は科目数が多いのでどういうグループで安定するのかは我々も最終的な答えが見えていません。やっぱり私たちもグループワークアワーでも作らないと課題を調整する時に各課題担当者にグループワーク課題を好きに出せるとできなくなるので、今調整しようとしているのはそれを特定学科の場合で考えると1か月に1つのグループワークでも半期で4つできるのです。そのぐらいでいいのではないか。その点では学生が集中できる仕組みを作っていくのが、こういうフリーライダーとかレベルについていけない学生を作りにくくする仕組みが必要だと思います。あと中教審についてお尋ねがきております。データ形式というお話があつたのですが弊害は何か。今は何が起きているのか。今は起きないようにしています。中教審の資料は単純集計かクロス集計か私たちもが発言するまではなかったのです。実は学長アンケートは大量解析したデータが広島大学にはあるのですが、そういうデータを持っていて継続的に使っていかないといけないというのは文科省がやつと気が付き始めました。今はほとんどの分析は委託事

業に出しているのですが、でないと印象論で語られるのです。いまだに産業界の方にはファンボルト式の教育をやっていると思い込んでいる方がいたりします。そうするとやはりデータで語っていく必要があるということです。後、質保証より入試の問題が大きいのではないかと高校教育部会と大学教育部会の協議はどういうふうになっているのかということですが、高校教育部会は高校教育のためのテスト開発を今優先的な課題として取り組んでおられます。高大接続部会は荒瀬先生と入っていますが、その周囲を前転しながらその問題は2つあると考えられています。1つは高校修了段階の学力の問題、つまり高校教育の質保証ができていないのが批判の1点。それが高校教育部会。それともう1つは暗記型学力の入試でいいのかということに対する大きな問い合わせが産業界にあるわけです。それについてはアメリカのSATやACTなども参考にしながら、国立教育政策研究所とか大学入試センターが様々なテストを思考開発していますので、これはおそらく参議院選挙後にならないと本格的な審議は始まらないと思いますが、比較的に自民党が民主党のやり方が嫌だというと、政策には入っていますよね。高大接続テストと書いてあるので、おそらく高大接続テストの大きな仕組みとしては今までとはペースアップして変わった方向にいくのではないかというような見方が強いと思います。ただ中教審の一斉委員が出ただけで臨時委員とか専門委員とか私とか荒瀬先生がやってきた役割についてお声がかかっていない、人選が遅れているというようなことですのでそのあたりも見定めて結論が出るのではないかということです。以上です。

高橋 ありがとうございました。それでは引き続きまして先ほどのフロアトークから出てきた質問に移らせていただきたいと思います。まずは非常に具体的で面白い質問です。荒瀬先生に質問なのですが、「堀川高校の生徒さんは十分に理解しています。その高校生が大学でどのような態度で過ごしているのか分かれば教えて下さい」という質問ですがいかがでしょうか。

荒瀬 いい話ばかりではなく、いろいろご批判も受けております。なまじそういうことをやって大学に入ると大学での学びが新鮮でなくって、偉そうにしている学生がいると思ったら堀川の卒業生だったとかもあります。なまいきな生徒が育っているのかもしれません。

それはさておき、きっちりと追跡調査ができていませんので知りうる範囲の話ですが、大学から就職する時

に、多くの卒業生が困っていないとは聞いております。就職して辞めた卒業生もいますが、卒業してよく学校に来ますので話を聞きますと、辞めたあとJICAでアフリカに行くとか、本当に興味のあることと思って入社したがそうではなかったので新たな職に転じているとか、そういう話を多く聞きます。これから分析をしていかないといけないですね。そのための追跡調査も考えていかないといけないなと思っています。全国の高校2年生を対象に10年間にわたって追跡していくという計画を進めていらっしゃる先生方がおいでで、私もそこに関わらせていただくのですが、その中で堀川高校の生徒に対しても分析したいと思っています。

高橋 ありがとうございました。先ほど出された質問で、幾つかFDに関わる質問、教職員に関わる質問を何通か提出していただきました。それらを象徴するような質問をピックアップさせていただきます。「教員や職員の主体性はどう作るのか。」という質問です。つまり今私たちは、「学生が主体的に学ぶ」ということをテーマにしているのですが、それと並行して「教職員が主体的に教える」ということを一方では考えていかないといけないと思うのですが、いかがでしょうか。濱名先生いかがですか。

濱名 重要な本質的なところだと思います。要はアクティブラーニングにできてもそれはどうやって主体的にできたのかどうかということですね。検証するのが実に難しい。私どもの大学では教員がティーチングポートフォリオを作っていくのでその中身をどう見ていくのかとか、学内の共同研究が2種類あります。研究所に所属して研究所をプラットホームにして学外の方も研究に入れてやるものと、本学の教育を改善するためだけであるならば個人研究も含めてアプライしてもらって構わない。そういう形でやりたいことを、自分の評価なり自分の研究なりに取り組めるようなことを作っていくことが1つの方法論としてあるとは思いますが、やはり僕は最終的には今日の隣の部会でもやっていますがアメリカのFDでも教員だけじゃなく学生を入れたりすることがある。学生を入れて常にFDをするのかは別として、どういうふうにして自分たちがティーチングを改善するようなことが楽しいとか面白いとかリアクションにつながるような経験をどう可視化するかだと思うのです。多くの場合はやっている先生はいいんですけど、やっていない先生にどう伝えるのかということで、研究費とか表彰するとかは外見的なものなので、そうならばポートフォリオだったり、FD

だつたり FD の場で投稿してもらうものであつたり、あるいは効果を、堀川の話ではないですが逆にそういう方法を導入していくたクラスの同級生がどういう成果を上げたか。私どもの教員評価の中にベンチマーク達成に貢献した教員はどうだったのか。うちは学生満足度よりもそっちの方が大事だという考え方を取っています、つまり思った通りの実感になるのです。学生に入つてもらっている先生のベンチマークの起用度が高いですね。何かしら可視化してそれを評価していくような仕組みも必要なのかなと思います。

高橋 ありがとうございます。荒瀬先生お願ひします。

荒瀬 大学と高等学校は違うかもしません。高等学校の場合、教員は生徒に本当に近いですで、生徒が変わっていくのを見たら、教員はやっていることに対する実感を伴つた充実感を味わうことができます。それがきっと教員の主体性を高めていくだろうと思います。

それと、ここも大学と違うところでしょうが、自分の子どもを入れたい学校はどんな学校かと考えたら、教員のなすべき取り組みが分かりやすくなります。どういう教員がいて、どういう教育環境が整えられているか、どういう毎日を生徒が重ねるか。そう考えると、自分の問題として考えることができて、具体的に動いていくことができます。

また、高等学校の場合は教職員数が少ないです。堀川高校も 80 人ぐらいで、その中で意欲的に動いている教員の姿、あるいは主体的に取り組む姿、それをかついいことだと思うと、周りが支えますし伝播していきます。生徒も教員も人ですからそこはよく似ていて、水は低きに流れますが、学びは高きに向かいます。そういうことを支える、例えば管理職の一言であるとか、後輩が先輩を見てあの人かっこいいですねと言うとか思うとか、実際に自分もやってみるとか、それを当たり前だとするような状況を作れば変わっていくというふうに思っています。

高橋 ありがとうございます。福田部長、お願ひします。

福田 私にはなかなか難しい質問なのですが、職員のベースで実感としては分かりやすいのは、やっぱり喜びですね。大学とかは非営利法人と呼ばれるじゃないですか。何を目的にやっているのかということで、うちの職員が変わっていくきっかけを見ていくとそこには喜びですか、自分がそれに関与できたという、そのパワー

がすごく大きくてそういう経験をすると変わっていっているなど。後、先生の場合ですが教育をしたくて先生になつた人がどれぐらいいるのかと思っていまして、大学の先生は実は自分の研究がずっとできるからそこに残っているのかなと実は思っています。うちの先生には平気で言うのですが、先生はオタクのなれの果てですよと。好きなことをやって尖がって、それは何の役に立つかを聞いても、楽しいからという人。僕らがいるのはその楽しさを伝えてほしい、そこしかないです。大学は多様性を受け入れる組織なのでいろんな先生がいても構わないと思っています。うちの教員評価、先ほども話させていただきましたがそこでも教育の点数、研究の点数、社会貢献の点数、全部点数制なのですが、それぞれの評価項目を決めて全部の点数を取らなくてもいいと言っているのです。教育が得意な人は教育でやってください。研究が得意な人は研究でやってください。先生方が堪えているのは学生の授業評価です。チェック項目が幾つかあるのですが、その裏に自由記入を設けてそこにどんどん好きに書いてもらっている。そしてそれをすべて先生にフィードバックするのです。その評価が惨憺なるものならばその先生は授業に一生懸命取り組みますし、もういいと言って研究に専念するからという先生もおられます。それはそれでいいと思います。共通してあるのは学生たちが変わってくれた時の嬉しさ。これが一番弟子の学生だと言える学生ができた時の喜び、そんな学生を作りたいといつも先生方がおっしゃっていますのでそこにあるのかなという気がします。

高橋 ありがとうございました。早いもので、午後 1 時からこのシンポジウムを始めましたが、もう残り時間が 7 分程となってしまいました。それでは最後に、まとめのコメントとしてお 1 人 2 分間程度ぐらいで最後のクロージングの言葉を頂ければと思います。それでは、濱名先生からよろしくお願ひします。

濱名 かなり沢山しゃべらせて頂いていますので短めに。とにかく日本の大学教育は学生達をどう 4 年間経つた段階でどう社会に送り出していく、自分たちが選択させることができるような準備をさせる大きなミッションを背負っているのです。ところが気を抜くと、放つておくと個々の教員であるとか学科であるとか、その目線が勝つてしまつて、学生たちが成績表を見た時にラッキーとか何故とか、そのリアクションが非常に残念なことでし、これはある審議会で言ったことがあるのですが、先進国の中で大学の成績が採用でこれだけリスペクト

されず、インターンシップの結果もリスペクトされないのは極めて例外的な国だということなのです。これはまさに相互不信の話を申し上げましたが、我々自身がもっと外に、学生たちに、社会に対して説明できるような教育の体系性とその成果をきちっと説明していく。その中に大学の中だけではなくこうやって高等学校の方とも議論をしていかないといけませんし、出口の社会の人たちに対してももっと大学の成績評価を信頼できるものと一緒にやって欲しいと。例えばインターンシップとかで実習とかそれが1つのプラットホームだと思うのです。研究を重視される大学も沢山ありますが、最大公約数、多数派は教育で成果を上げていくしかない。学生募集だとかいろいろな就職の支援も大切ですがやはり教育が我々にとって商品だろうとすれば、その商品を絶え間なく改善していくって社会に貢献できるような組織的な取り組みを皆様と一緒に作っていければと思っています。以上でございます。どうもありがとうございました。

高橋 ありがとうございます。荒瀬先生お願いします。

荒瀬 ある国立大学の教育系学部の1回生のポスター発表を拝見したことがあります。そこで学生に対していろいろと質問をしてくださいと言われたのですが、発表を聞いていて非常に疑問に思ったことがありました。

その学生たちは地域に入って子どもたちといろんな活動をしています。例えば、紙すきであるとか、地域の文化を調べるとか、お年寄りから古い出来事を聞き取るとか、いろいろやっているのですが、その一つ一つに評価項目がありまして、これをしたら子どもたちにはこんな力が付く、また、やっている学生にはこんな力が付くといった項目が幾つか並べてありました。その内容が子どもたちと学生とで違うのです。子どもたちに付く力と学生に付く力をわざわざ分けていて、別のことが書いてある。それが非常に疑問だったので、発表の中身の話ではなく、そもそもこれはどういうことですかと質問をしたら、驚いたことに、学生は「分からないです」と答えるんです。代々こういった観点で評価をしてきたのですかと聞いたら、それも「分からないです」。顔を見合わせて困ったような微笑を浮かべて。

分からぬことだらけなのに学生は真面目にやっているのです。日本の学生の多くは、そういった傾向にあるのかなと思いました。まじめだけれど疑問を持たない。やれと言われたことは素直にやっている。でも意味は分かっていない。

ですから大学皆さんにお願いしたいことは、是非問

いかけをしてくださいということです。それはどういう意味ですかと。なぜやっているんですかと。たぶんそれもまた、申し訳ないことに初等中等教育でやっておかなければならなかつたことをやり残してしまったのだろうと思いますが、彼らのこれからのために、是非大学でそういったこともお考えいただけたらと思います。

さきほどの学生たちですが、そういうふうして1人が私に質問をしました。「学習意欲はどうしたら生まれると思いますか」。そんなことが分かったら本に書いたらきっとよく売れるでしょうね、と答えました。それで、先ほどいろいろとやり取りをしていた学生が嬉しそうにしていましたので、君は今、学習意欲が自分の中にありますかと尋ねたら、「今はすごく勉強したい気になっています」。それはどうしてですかと聞いたら、「さきほどのやりとりで、今まで気づかなかつたことに気づけたからです」というのです。

あらためて思いました。知識をきちっと教えないといけないし、尋ねることもしないといけない。そして、自分が気づけたと本人が思えるような経験も提供していかないといけない。そこが今の日本の初等中等教育、そして高等教育の抱えている、共通の課題ではないかと思います。以上でございます。ありがとうございました。

高橋 ありがとうございました。それでは最後に福田部長お願いします。

福田 私、実はこちらに座っていますが、本来今日はすごく勉強させて頂いた立場で、まとめのお話をする立場ではないです。本当に勉強になりました。ありがとうございます。私は、原点に戻るというのが癖なのですが、常々思うのは、大学の使命がなんなのかということなのです。アメリカのとある大学の副学長さんの言葉らしいですが、大学の使命は知をまわしていくことだ。どういうことかというと、研究によって知を得て、その知を教育によって伝える。教育によってその知を伝えられた学生たちが社会に出てその知を使うことで社会貢献をする。教育、研究、社会貢献というのは三角形で知の獲得からぐるーっと始まって社会に出たところはフィードバックがかかるてくる。これをぐるぐる回せることが、それがプラスのスパイラルで回すことが大学の使命なのだと聞いて、なるほどと、常々そこに戻って考えるようになっています。これもまたアメリカの大学の学長の受け売りなのですが、大学職員ですのでどちらかというとどうやって大学を運営していくかトップマネジメントを支える立場ではあるのですが、僕の前任校のボス。濱名先生は

ご存知ですが、そのボスが外国に行った時に、大学運営で何が一番大事なのか質問をしたみたいです。その当時のことですから何かを得られると思って質問をしたみたいですが、出た答えが、Love & Passion That's all だったそうです。愛と情熱だけでいいのだと言われたと。そうやって原点に返っていくとそうなのかなと思いました。それで最近は Love & Passion That's all ばかり言っているのですが、その気持ちがあるから学生を支えたいし、伸びてほしいし、育つ環境を提供してあげたいし、主体性を持たせる環境は守ってあげたい。すべてはそこにいくのではないかなと思います。大学の使命と Love & Passion これだけがあればいいのかなと個人的には思っています。すみません、まとまりないですがありがとうございました。

高橋 シンポジストのみなさん、本当にありがとうございました。今の福田部長のお言葉である「Love & Passion. That's all」という言葉は、このシンポジウムのために正に相応しいのではないかと思います。今回シンポジストの皆さん 3 人とも非常に魅力的だなと感じました。主体的な学び、あるいは主体的な学ぶことに関して主体的に語ることが出来る。主体的な言葉を持っているということが非常に魅力的でした。その魅力的な言葉を通じて皆さんの中に新しく獲得したもの、芽生えてくるようなものがあればコーディネーターとしてとても嬉しい限りです。

それでは、フロアの皆さん、長時間にわたりご協力ありがとうございました。最後になりますがシンポジストの皆さんにもう一度拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

世界で学び、社会で活かす。
抜粋編

ハイ・インパクト・プラクティスの 導入から始まる学びのイノベーション

～学生が主体的に学ぶ力を身につけるには～

大学コンソーシアム京都
第18回FDフォーラム 2013.2.23
関西国際大学 学長 濱名 篤

関西国際大学

構成

- データからみた学士課程教育の課題
- “質的転換答申”からどのように改革していくべきか？
- 教育成果をどのように可視化していくか
- まとめ

2

学生の自己評価も低調（大学教育部会資料抜粋）

大学教育の成果に関する学生の自己認識

学生の5~8割が「論理的に文章を書く力」、「人にわかりやすく話す力」、「外国語の力」についての大学の授業の有効性を否定的に捉えている。

○ 大学の授業は、どのくらい役立っていると思いますか。また自分の実力はどの程度あると思いますか。

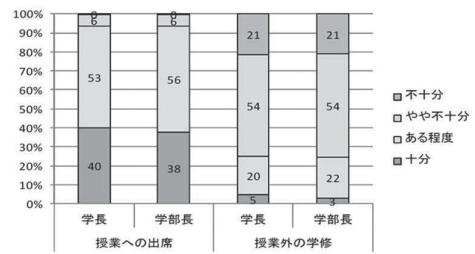
	これまでの授業経験は		自分の実力は	
	教えてない	教えている	平手	上手
将来の職業に関連する知識や技能	9.5	29.6	42.4	17.2
専門分野での知識・理解	4.7	23.8	49.5	20.5
専門分野の基礎となるような理論的理解・知識	1.3	24.0	48.7	20.8
論理的に文章を書く力	16.0	38.9	32.3	10.6
人にわかりやすく話す力	20.2	40.5	29.2	8.6
外国語の力	25.7	36.6	26.5	9.7
ものごとを分析的・批判的に考える力	9.2	35.2	42.0	11.9
問題をみつけ、解決方法を考える力	9.9	37.7	40.5	10.2
幅広い知識、ものみかた	7.6	30.4	44.9	15.6

出典：東京大学 大学経営・政策研究センター(CRUMP)「全国大学生調査」(2007)

3

授業には出席するが授業外学修は不十分

図表1 学修時間の現状について (%)



出典：文科省 全国学長・学部長調査 2012

4

偏差値ランクは学修時間と相関が低い（大学教育部会資料抜粋）

授業外学修時間と授業出席率（大学別平均値）

(IDE現代の高等教育 No.515 2009年11月号「学習行動と大学の個性」両角亜希子 図表3を基に作成)

「偏差値ランクや設置者による違いをみれば、これらの大学特性と授業外学修時間はあまり関係ないことがわかる。」

偏差値ランク	授業と関係ない学修 (左軸) [時間]	授業間違学修 (右軸) [時間]
A 高	11.5	1.5
B 中	11.5	1.5
C 低	11.5	1.5
D 低	11.5	1.5
E 高	10.5	1.5
F 低	10.5	1.5
G 中	10.5	1.5
H 低	10.5	1.5
I 低	10.5	1.5
J 低	10.5	1.5
K 中	11.5	1.5
L 中	10.5	1.5
M 低	10.5	1.5
N 中	10.5	1.5
O 低	10.5	1.5
P 高	10.5	1.5
Q 低	10.5	1.5
R 高	10.5	1.5
S 中	10.5	1.5
T 低	10.5	1.5

(注)人社会分野の1年生から3年生までの合計サンプルが110名以上で、1学年のサンプルが50名以上の20大学を取り上げている。
高中位は偏差値ランクをG(5位以上)、中:45~56位、底:45未満)、3位は公立大学であることを示している。

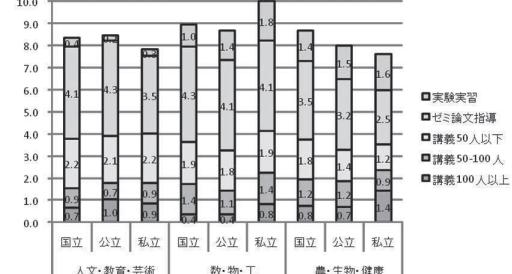
5

教員の負担コマ数は8コマ・大人数授業は多くない（大学教育部会資料抜粋）

(大学教育部会資料抜粋) 教員の担当授業コマ数の状況

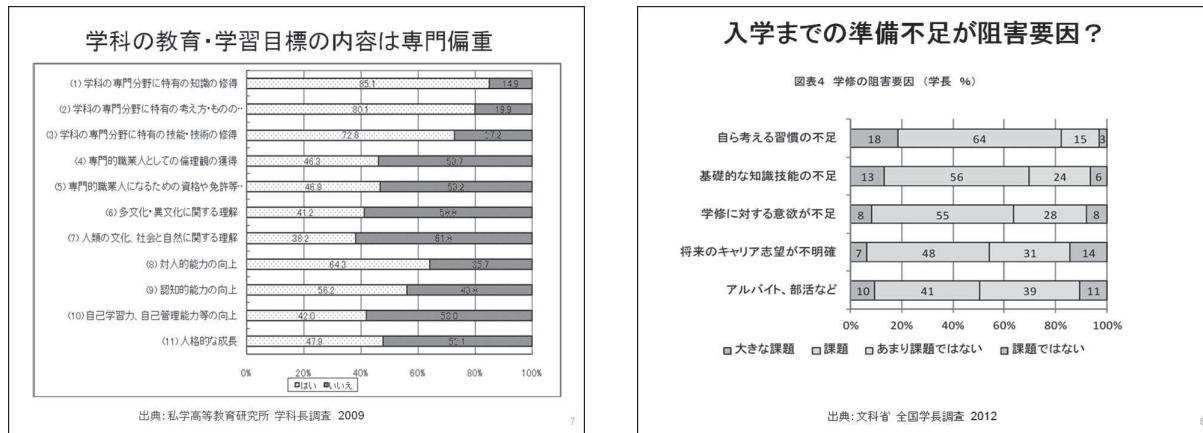
我が国の大学の教員の一学期当たりの担当授業数は8コマ程度が多い

1学期あたり担当コマ数 専門別



出典：東京大学 大学経営・政策研究センター(CRUMP)「全国大学教員調査」(2010)

6



能動的でも主体的でもない 学生の学びの現状

- 学修成果の社会的通用性に疑問
- 教室内学習はしても、教室外での学びは不十分
- 教員にとっての教育のウェイト拡大、大人数講義は少數に
- 教員は専門重視で、“学位プログラム”とは乖離
- 入学時から準備不足の学生への対応が課題

これまで解決を先送りしてきた大学教育の質

30年以上前からの宿題

- 1970年のOECD教育使節団の報告書の作成に参加したR·Dore教授は、国立を頂点とするピラミッド構造の一番下に、さらにピラミッド構造を持つ日本の私立大学の、その下の方の大半ならば「金さえ払えば、静かな、累れないチバンジーさえも入れる」と酷評(入試の難易度という一元尺度を前提)
- 「頭の良い学生ばかりでなく、平凡な学生も大学に入れるのは、少しも悪いことではない。むしろ、相当数の学生が、頭が良かろうと悪かろうと、たいした努力もなく、成長もなく、目標もなしに漠然と大学を通り抜けることが悪い。これこそ、多くの大学の本当の恥と、また犯罪とすべきことである(ヨゼフ・ピタウ 1980)

中教審の問題意識

- 「学修時間の短さ」は論議の“始点”、到達目標は学修成果の質向上
- 個人にとっても社会にとっても、予測困難な時代(グローバル化、少子高齢化、成熟社会化)
- 答えのない課題を見出し、解決できる主体的な学びができる学士課程教育への質的転換が急務！
→認知的能力(知識・技能を活用して課題解決できる論理的、批判的思考力等) + 汎用的能力(チームで行動できる能力、積極性、倫理性等)
- そのためには必要な仕組みづくりが必要(教員任せ、学部教授会任せでは、間に合わない？できない？)

答申を肯定的に評価できる点

- 1)学修時間という定量的数据に注目した分かり易さ(同時に、時間だけで“質”が後回しという弊害も併発)
- 2)教員個人任せであった高等教育を組織的な教学マネジメントで質保証する“仕組み”を提示
セメスター制導入時の問題(=科目細分化・低密度)への対応
- 3)高校教育部会委員との合同協議の実現
- 4)学生の声を参考に確定した(奨学金等)
大学教育改革地域フォーラムという置きみやげ

“学びのイノベーション”の現状とその促進

- ・教育方法としては、Active Learning、経験学習重視という方向性(例: High Impact Practice)が注目されているが、学習スキルを含めた初年次教育、キャリア教育の普及は進んだが、導入状況の類型ごとの差(専門分野、規模、学力)は大きい
- ・学習成果に効果があるとはいえるが、学外での「経験学習プログラム」はまだ導入は少ない→教員任せでは進まない?
- 教育方法の改善を今後も促進していく必要性: ポストGP
- 教授過程、学習過程の目標設定から体系的、自律的改革の促進(高等教育版“学びのイノベーション”?)

13

ハイ・インパクト・プラクティス

(HIP=High Impact Practices)とは?

- ・能動的な学習法や、集団での学習課題を行う方法、多様性/グローバル学習、日本の卒業研究に近いキャップ・ストーンなど、構造化した能動的な学習が高いインパクトを与える教育
- ・HIPは初年次セミナーから始まる
→能動的・自律的な学習のスタートとしての初年次教育の重要性

14

HIP(High Impact Practice)型の教育方法

経験の少ない学生にインパクトのある、現実社会とのリバース(繋がり)を感じさせる教育方法の採用

- ・能動的(active)
- ・体験型(hands-on)
- ・集団型(collaborative)
- ・調査型(inquiry-based)

15

High Impact Practices by George D. Kuh (AAC&U, 2008)

- First-Year Seminars and Experiences
(初年次セミナー)
- Common Intellectual Experiences
(共通の学習経験。例: コモン・リーディング)
- Learning Communities(協同履修)
- Writing-Intensive Courses
- Collaborative Assignments and Projects
(グループ単位での課題提出やグループ・プロジェクト学習)
- Undergraduate Research(フィールド調査)
- Diversity/Global Learning(海外プログラム)
- Service Learning, Community-Based Learning
(サービスラーニング)
- Internships(インターンシップ)
- Capstone Courses and Projects
(卒業研究: 元々は優秀学生向きのプログラムを対象拡大)

16

学生を支援し効果的な学習経験を可能にする「環境」を重視する教育へ

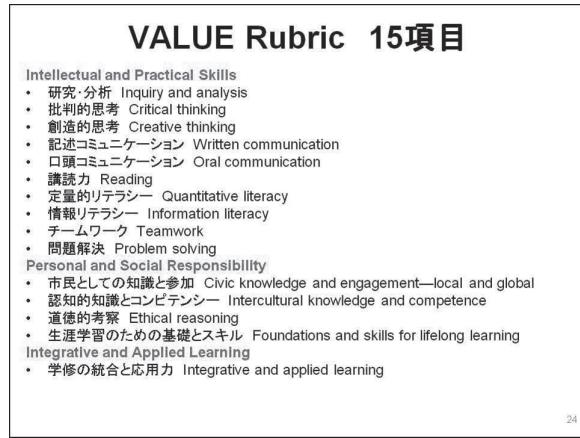
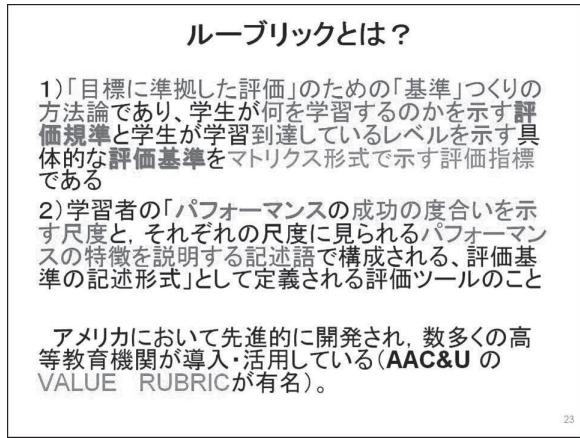
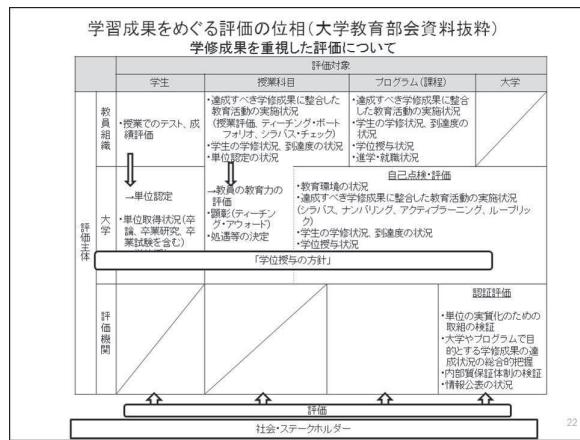
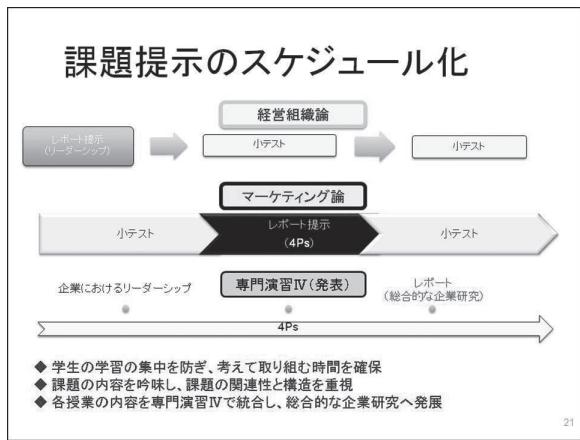
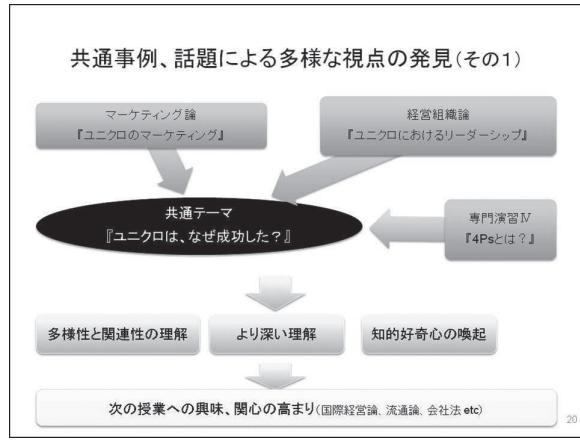
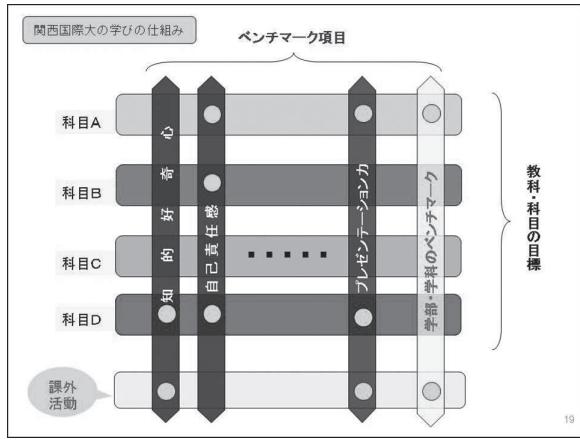
- ・初年次セミナーのような1年生向けの授業から始まり、学生たちが協働しながら複数の科目を履修する(担当教員も連携しながら教える)ラーニング・コミュニティ、サービスラーニング、調査研究、インターンシップなどの教室外学習プログラムを含む
- “High Impact Practice”的導入が必要
- ・“Active Learning(能動的な教室での学習方法)”(グループワーク、発表、ディスカッション、頻繁な答案やレポートのフィードバック)を初年次教育に組み込んだり、2年生以上の科目まで範囲を拡大したりして、システムティックな学士課程教育を展開することが必要

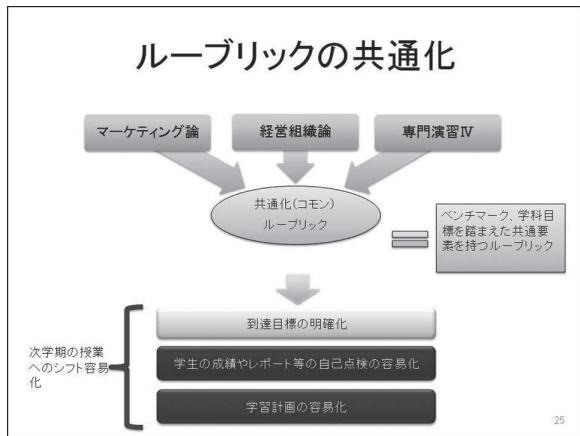
17

科目間連携と教員間連携による教育の構造化

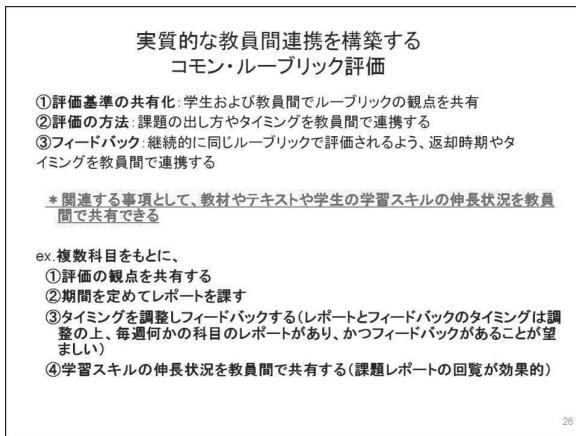
- ・日本の高等教育は何故、小中学校より国際的評価が低いのか?
- ・12科目を同時に履修しているとすれば、1科目のエフォート率は平均8~9%にすぎない!?
- ・「年2回だけ試験勉強」→「年4回だけ勉強」?
- ・グループワーク課題も毎週複数科目では協働機会がつくれない(cf. アルバイト回数・時間)
- ・教育・学習目標も教員任せだと偏りが大きい
- ・科目間・教員間連携の集約型がカリキュラム・マップ
科目間の縦と横のつながりの可視化→実態化
→“ナンバリング”を求める
(学内→大学間連携→国際通用性)

18

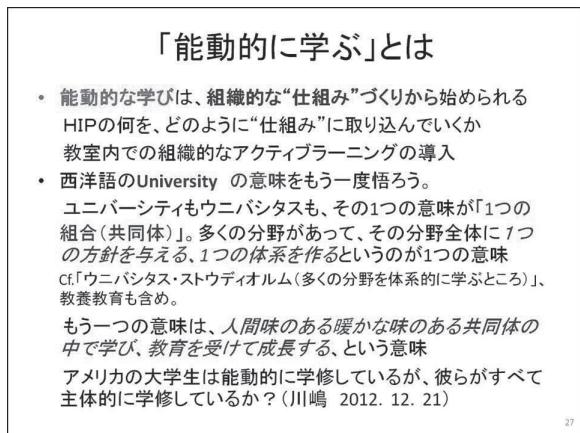




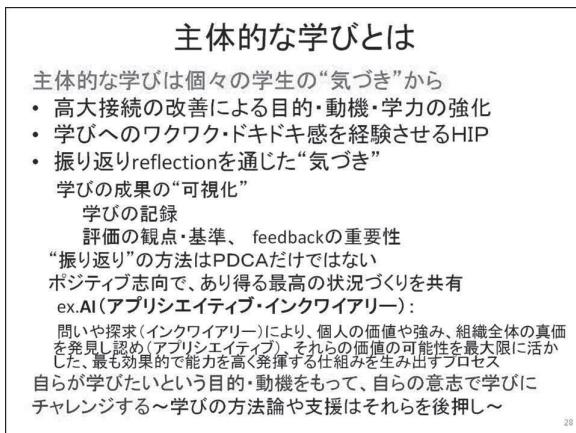
25



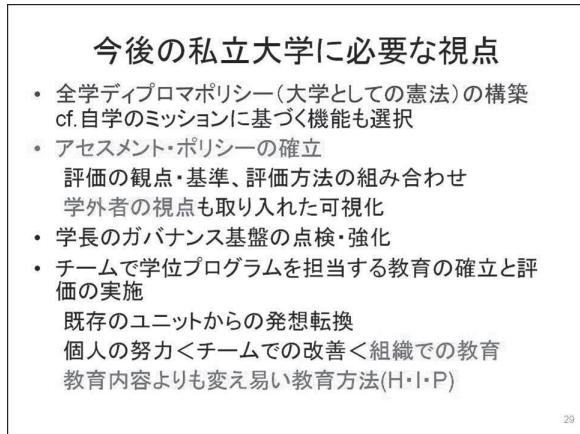
26



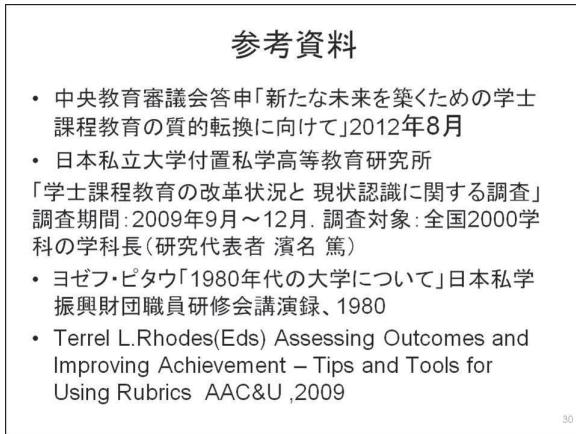
27



28



29



30

主体的な学びを育てる仕組み

1. 中教審高等学校教育部会・高大接続特別部会で

■ 「勉強しない」高校生

■ 高校卒業までに身につけておくべき力とは何か

○教育基本法第五条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

○学校教育法第三十条 小学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第二十一条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うこと、特に意を用いなければならない。 (中学校・高校においても準用)

○学校教育法第五十一条 高等学校における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。

二 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。

三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。

■ 京都市教育委員会・中高接続プロジェクト

2. 「人間は取り組みを通して成長する」

■ 探究五箇条

○知らないということを知れ (知りたい・思考錯誤・メタ認知・発見の感動)

○常識を学べ (考えるためのすそ野を広げる・「巨人の肩」にのる)

○常識を疑え (多様な角度から見る・批判的思考力)

○手と頭を動かせ (具体的行動と思索・仮説検証)

○朋と愉しめ (コミュニケーション・共有・協働)

■ 合格する生徒の特徴

○自分自身の進学の目的を明確に持っている、持とうとする (これをしてみたい)

○志をもって挑戦する (こうありたい)

○弱点を把握して取り組む (課題設定・自己管理)

○授業の予習をする (シミュレーション・計画性)

- 自分の思いや体験を言語化する（自己内外のコミュニケーション）
- 自分のやりかたを見つけた、見つけようとする（個性・独創性）
- あえて負荷を与えること
 - 必ずしも「安全・安心・簡単・手軽」でない学び・学校生活
 - 「15センチの段差」
 - 「適度な貧乏」……的川泰宣 JAXA 名誉教授
- 体験と言葉、そして「評価」の大切さ
 - 行動（特に知的活動）のインセンティブ
 - 好奇心に火をつける
 - 居場所とやりがい

3. 生意気であれ

- 「学校」は学びの場だ……学ぶものとしての謙虚さをもて
- 「学校」は小さな社会だ……大きな子どもでなく、小さなおとなに
- 「学校」は楽しいところだ……自らが楽しさを創れ
- 学ぶ意味を考える／堀川高校シラバス～すべては君の「知りたい」から始まる～

○健全な批判力を

批判とは、誤りや欠点を指摘するだけでなく、物事に検討を加えて判定し評価するという意味がある。角度を変えて見つめる。それらを吟味して、その対象がどういう意味をもつのかについて考える。そして、その対象にどのように関わっていくのかを自問自答する。経験を重ねて、そのような批判力を身につけよ。

＜批判的思考力＞ 情報を観察し、分析し、論証し、最終的には 自分の意見を提示する一連の思考技術（三森ゆりか・つくば言語技術教育研究所長）

○メタ認知能力の向上を

メタ認知とは、人間が自分自身を認識する場合において、自分の思考や行動そのものを対象として客観的に把握し認識すること

アレクサンダー大王の「ゴルディアスの結び目」という逸話がある。彼は、「運命とは伝説によってもたらされるものでなく、自らの剣によって切り拓くものだ」と言って、「結び目」を一刀両断のもとに切ったという。それは英雄の問題解決能力を示すものかもしれないが、私たちの採るべき方法ではないように思う。

複雑な問題に対応するときに有効な方法は、対象を要素に分解し、その一つ一つについて吟味し、全体の解決方法を探ること。自分がいま何をしているかを意識しながら。使いやすい要素だけを選び取って、不都合な、あるいは面倒な要素を捨てたり排除したりするといった思考の単純化をしてはならない。

○疑問を大切に

「知りたい」という思いを抱き続けよ。答えは容易に出ない。答えと思ったことが、新たな疑問や悩みの始まりになるかもしれない。学ぶということは、それを繰り返すこと。そうすることによって成長していく。思索し、行動し、自立する、ひとりの人間として、よりよく生きていくことを期待する。

第18回FDフォーラム 主体的な学びを育てる仕組み

2013.02.18 京都市教育委員会教育企画監
荒瀬 克己

- ①勉強しない高校生
- ②高校卒業までに身につけるべき力
- ③探究五箇条
体験と言葉
あえて負荷を与える
- ④学ぶ意味を考える

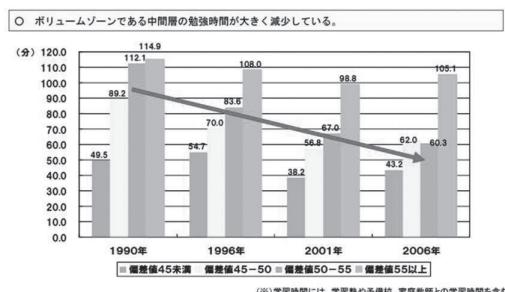
中教審高大接続特別部会

- 社会のグローバル化
- 大学教育のユニバーサル化
- 学士課程教育の質保証の必要性
- 大学入試適正化の追求
- 入学率98%の高校教育の質保証
大学からの要請・社会からの要請
将来の「生徒」からの要請

中教審高等学校教育部会

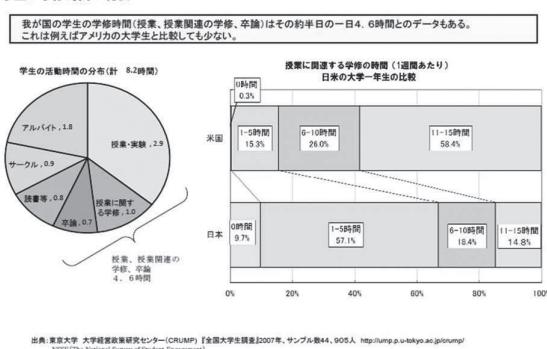
すべての生徒が身に付けるべき「コア」についての議論
「市民性」と「学習意欲」が重要ではないか
委員(労働政策研究者)
高等学校教育に期待されるものは、
将来社会に出た際に必要な職業的
自立に向けての力を育成することで、
それは変化に対応するために学び続ける力(学習力)だ。

高校生の学校外における平日の学習時間の推移



5

学生の学修時間の現状



6

**大学に入学した後、
かれらはどう生きるのか？**

**高校卒業後に就職するとな
らどんな力が必要になるのか？
そのために、
学校で何を学べばよいのか？**

「底の抜けた高校教育」

基礎学力をつけられない……

学習意欲を引き出せない……

高校教育への痛烈な批判

教えてもらうのを待つだけ

楽なことならやってもいい

考えない・耐えない・挑戦しない

- ①勉強しない高校生
- ②高校卒業までに身につけるべき力
- ③探究五箇条
体験と言葉
あえて負荷を与える
- ④学ぶ意味を考える

学校教育法第三十条 小学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第二十一条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

第五十一条 高等学校における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 一 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。
- 二 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。

三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。

- すべての高校生に対して、これらを高校教育の中でどのように実現していくのか？
- その前提＝中学校と高校において、生徒につけるべき力と、生徒から引き出すべき力が認識されているか？

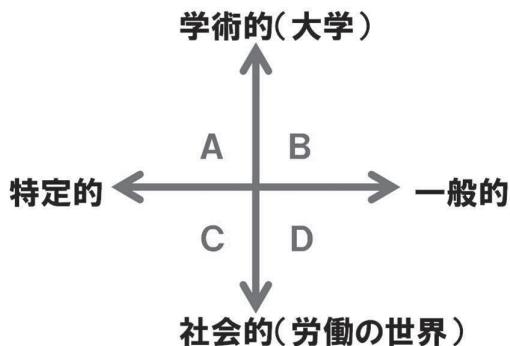
中高接続プロジェクト

京都市の中等教育の

「質保証」を実現するために
めざすべきキャリア教育の実現

生徒が将来、自立・自律した市民として
よりよく生きるために、中等教育の中で
一貫して生徒の力を引き出し、学び続ける意欲を育てることを目的として、
中学校と高等学校の接続を図る。

13



Barnett.R (1994) ,The Limits of Competence (川嶋太津夫神戸大学大学教育推進機構教授による)

○批判的思考力

○メタ認知(能力)

○構造化

……について考えてみる

批判的思考力とは、
情報を観察し、分析し、論証し、最終的には自分の意見を提示する一連の思考技術

三森ゆりか・つくば言語技術教育研究所長
「内外教育」2010年11月16日第6037号

メタ認知(能力)とは、
人間が自分自身を認識する場合において、自分の思考や行動そのものを対象として(可能な限り客観的に)把握し認識すること(能力)

ものごとは
さまざまな要素によって
成り立っている

どう読み解くか

- 全体を把握したうえで、
- その構成要素について明らかにする。
- 構成要素間の関係を分かりやすく整理する。都合の悪い要素を切り捨てない。

「構造化」

「構造化」できると

- 全体が把握できるため、漏れや重なりを回避しやすい。
- 要素間の関係が明らかなので、修正や問題解決の際に的確な対処ができる。
- 情報共有しやすい。

つまり、

「構造化」という思考技術は、問題解決とコミュニケーションの場面で役立つ。

communication

社会生活を営む人間の間に行われる
知覚・感情・思考の伝達。

言語・文字・その他視覚・聴覚に訴える
各種のものを媒介とする。

commitment

委託、公約、約束、責任、犯行
かかり合い、参加

(参考) *participation 関与*

GLOBAL COMMUNICATION SKILL

グローバル・コミュニケーション・スキル

=異文化理解能力

(合意形成能力・人間関係形成能力)

「みんなちがって、たいへんだ」

平田オリザ氏

22

人間だれしも、成長するにつれて、家庭や近隣のフェイス・トゥ・フェイスの第一次集団から脱して、気心の知れない社会集団に組み込まれる。そこでの伝達は、相手を自分とは異質のものと見る前提が必要となる。

ことばというものは、相手との心理的、物理的、文化的距離によって最適な表現形式を決めなければならぬことを思い知らされる。

23

この認識がないと、伝達はひとりよがりになる。

ついには、どうせ話したってわからないとあきらめて、自分の殻に閉じこもる仕儀となる。あるいは類は友を呼ぶで、同質の人間としかつき合わなくなる。

稻垣吉彦『国文学 解釈と教材の研究』p.8 1月臨時増刊号
平成7年1月10日発行 第40巻2号

24

- コミットメントを進めるために
コミュニケーションが必要になる
- コミュニケーションが成立すれば
コミットメントが容易になる

しかし、コミュニケーションは
決して容易ではない

25

コミュニケーション

- 実際にはとても難しい
「なかなか通じない」・「伝わらない」・
「何を言いたいのかわからない」…とか
- おもしろいことは少なくて、
ぶつかること、堪えることは多い
「頭にきた」・「どう言えばいいのか？」・
「いつも叱られる」…とか
- 耐えて続けるのはしんどい

なぜ伝わりにくいか？

それぞれに「文脈」があるから

- 自分の言いたいことがある
- 相手の言いたいことがある
- また、自分の聞きたいこと、
相手の聞きたいこともある
- ものごと固有の文脈も
まことままならぬ

それなら、

- その「文脈」を明らかにできれば
- 自分の「文脈」を知り、
相手の「文脈」を探し、確かめ、
通じ合わせようと模索することができれば

とてもしんどいことだけれど

「海外行って価値観変わったわ」などとよく言います。しかし、私が3年間の高校生活を経て感じたことは、「価値観が変わった」というよりも、むしろ「価値観が増えた」ということです。物事の正邪、善惡、美醜の判断基準として、誰もが自分だけの価値観を持つっています。それは文化圏がちがえば当然異なるし、同じ文化圏どうしても多少は異なっている。だから、大なり小なり意見の衝突がおきるわけです。それを「価値観の相違だよ」といつて切り捨ててしまうのは、あまりにも勿体ない。

探究基礎では、自分が物事をどう見たかを自分の言葉で表現し、また相手の表現したものを受けとる力が求められます。そのなかで相手と異なっている部分があれば、対話を通じてとことん突き詰めていく。すると、「アツこんな見方也有ったんだ」と腑に落ちる瞬間がやってくる。これこそが、私が「価値観が増えた」と感じた瞬間です。海外研修でも、異なる文化圏に生きる人との価値観のちがいに衝撃を受けながらも、そのような価値観もあるものだと得心し、自分の中に取り入れることができました。

価値観が増えると、自分が物事をどのように見ているのかがありありと浮かび上がってきます。つまり、自分の価値観を確固たるものとして自覚することができるのです。同時に、自分がいかに偏った一面的な見方をしていたのかを、深く自認します。他の人の価値観と真剣に向き合い、対話を通して自分のものにしていくのは、とてもスリリングです。私にとって堀川高校での3年間は、こういったスリリングな体験の連続でした。そのなかで、自分自身をしっかりと見つめることもできたと感じています。

富森大地・11期生探究基礎委員長

- ①勉強しない高校生
- ②高校卒業までに身につけるべき力
- ③探究五箇条
体験と言葉
あえて負荷を与える
- ④学ぶ意味を考える

探究五箇条

- 知らないということを知れ
- 常識を学べ
- 常識を疑え
- 手と頭を動かせ
- 朋と愉しめ

- 批判的思考力
- メタ認知(能力)
- 構造化
- 学習意欲(関心・工夫・挑戦)
容易に答えの見つからない問い合わせに対し謙虚に立ち向かおうとする姿勢
- 簡単には折れない心(復元力)
つらさ・さびしさ・困難への耐性、タフネス

34

決してすべてが
用意されているわけではない
先回りの保護ではなく
意識的な不完全を仕掛ける
見守る

- 「安全・安心・簡単・手軽」
だけでは、人は育たない
- 守られている中で、
「危険・不安・複雑・面倒」
が用意されてこそ育つ
- 15センチの段差
- 「適度な貧乏」JAXA 的川泰宣氏

探究基礎

大切なのは学び方を学ぶこと

すべては君の「知りたい」から始まる
「知りたい」を見つける

容易に答えの見えない問題に
気づいて立ち向かおうとする力

問題の立て方、認識の方法、論文の書き方、発表の仕方など、学問という行為を構成しているさまざまな手順には、それぞれの時代に、一定程度、共有されている技術ないし作法があります。

小林康夫・船曳建夫編『知の技法』(東大出版会、1994年)

探究とは？

この世の中がどうなっているのか？といふことを知るための営みです。ここで世の中という言葉は、人間社会・文化・芸術・宇宙・物質・生命、またそれらに対する我々の考え方そのものも含んで用いています。

これらのことについて知るために、様々な事実を収集し、それらを筋道立てて組み合わせる。よりよく探究するためには、その事実の集め方、筋道の立て方を知る必要があります。

この探究のための作法を学ぶのがこの授業の目的です。

課題解決能力

不思議に気づき(疑問や発見)、取り組むことのできる課題に設定して(構造化)、自ら解決を図る力

受けとる力 考える力
判断する力 表現する力

前期

1年

後期

2年 前期

HOP:
「知る」基礎を学ぶ

STEP:
新たな知識を得る

JUMP:
探究を実践する

少人数講座（ゼミ）

JUMP(第3ステージ)へ

研究計画書

ゼミ担当者(教員・TA)が専門
研究内容の説明・交流

段取りを組む力

アウトラインの構築

どういう意味？	定義
それ事実？	根拠
なぜそうなるの？	論理
問い合わせる重要性	
体験の中での言語活動	

ポスター形式の発表

完成した研究発表をするのではなく
やりとりを通して気づきを生む機会

「探究基礎とは自問自答である」
「楽しんどい」

試行錯誤や自問自答は青年の成長
を促す貴重な機会

生徒による委員会で進行管理

PBL

バックヤード体験
リハーサルがいちばんおもしろい
見えるものは見えないところで
準備されている …体験の経験化

①勉強しない高校生

②高校卒業までに身につけるべき力

③探究五箇条

体験と言葉

あえて負荷を与える

④学ぶ意味を考える

キャリア：人が、生涯の中で様々な役割を
果たす過程で、自らの役割の価値や
自分との関係を見いだしていく連なりや
積み重ね

キャリア教育：一人一人の社会的・職業的
自立に向けて、必要な基盤となる能力
や態度を育てることを通して、キャリア
発達を促す教育

平成23年1月中教審答申

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

白河総合支援学校研究発表会 2013年2月9日土曜日
渡辺三枝子 立教大学大学院特任教授

○チーム白河

教職員がチームを組む＝目標に向かって協働する

○共通教科と専門教科の統合

ふり返り：自分の経験を意識化する

自他とのコミュニケーション：自立の重要な要素

○意識的な言語活動

言葉がなく静かだ、指示のみでやりとりがない ダメ

ふり返り・気づき・ことば

「はたらく」ことを学ぶ …<キャリア発達>
他者との関係の中で自分の能力を活かす
他者のために何かをするよろこびを得る

*縦割り：下級生が上級生に質問する
上級生は下級生のモデルになる
「モデル」をつくる・みつける
自分でやってみる(チャレンジ)
その経験が他の活動に広がる
ふり返り・気づき・ことば

おもしろくはたらくためには
居場所とやりがいがあれば

自ら居場所をつくる
自らやりがいを生む

自己との対話を重ねつつ、
他者や社会、自然や環境と
共に生きる、積極的な
「開かれた個」であることが
求められる。

中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び
特別支援学校の学習指導要領等の改善について」2008年1月

高知工科大学 総務部長

福田 直史

はじめに

福田は何か？（大学職員歴）

1992 (H4) 学校法人大阪国際学園入職（大阪国際女子大学・短期大学勤務）
一貫して入試課で学生募集担当、将来計画室兼務

2000 (H12) 学	教務系の人間ではありません。
H12～	場違い？
H17～	
H19～	
H20～	（法人化）

2009 (H21) 公立大学法人高知工科大学入職
H21～企画広報（入試兼務）
H22～総務
H23～広報室兼務（H24まで）

場違いな私がここにいる理由

今年度のSPODフォーラムでボスに取引され、
パネリストで参加。



たまたまSPODに参加していた、大学コンソーシアム京都の皆さんに「ややウケ」。
おそらく 一丁、ギャンブルするか！でここに…。

ちなみに今年のSPODは…

統一テーマ「学生に深い学びをもたらすために」
(8月22日(水)～24日(金):徳島大学)

シンポジウム
「アクティブ・ラーニングを通して、いかに学生に
深い学びをもたらすかー教員・職員と共に考えるー」

パネリスト:溝上 慎一先生(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)
土持ゲーリー法一先生(帝京大学高等教育開発センター長・教授)
コーディネーター:宮田 政徳先生(徳島大学 大学開放実践センター准教授)

実は、対先生要員としてピックアップ

アクティブ・ラーニングを 促す環境整備

これが、SPODでの私の発表。

公立大学法人 高知工科大学
福田直史

おかげさまで
アクティブ・ラーニング
「能動的な学習」・「主体的な学び」
の勉強になりました。

第18回FDフォーラムは…

全体テーマ
「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」

第1シンポジウムのテーマ
「主体的な学びを支える仕組み」

パネリスト：濱名 篤 先生（関西国際大学 学長）
荒瀬 克己先生（京都市教育委員会）
コーディネーター：高橋 伸一先生（京都精華大学 教授）

SPOD vs FDフォーラム

SPOD

「学生に深い学びをもたらすために」

「アクティブ・ラーニングを通して、いかに学生に深い学びをもたらすか
- 教員・職員と共に考える -」

FDフォーラム

「学生が主体的に

学ぶ力を身につけるには」
「主体的な学びを支える仕組み」

うん。よく似てる。

前回勉強したことが生きるかも？

シンポ概要より勝手に抜粋

「主体的な学びの確立」・「主体的に考える力の育成」という教育的課題の重要性

→ 職員の立場でしゃべっていいの？

教授法、カリキュラム編成、アセスメント、教員組織、学修支援環境などの様々な点で、主体的な学びを支える「仕組み」を有機的に作り上げていくことが必要

→ 学修支援環境ならいいかな。

SPODフォーラム前に勉強したこと。

福田のアクティブ・ラーニング解釈

アクティブ・ラーニングは学生自身を
「その気にさせる」しかけ。



「その気」になれば、勝手に勉強しよる。



使える人材になる。

SPODフォーラムで納得したこと。

福田のアクティブ・ラーニング理解

アクティブ・ラーニングは学生自身を
「その気にさせる」しかけ。
↓
「その気」になれば、勝手に勉強しよる。

アクティブ・ラーニングで得た習慣が、
アクティブ・アクションにつながる。

↓
使える人材になる。

ちょっと考えてみた。

アクティブ・ラーニングを通して、
知識や学力を蓄積させるだけではなく、様々な
知識を結びつけて、「考える力」、「行動する力」
「創造する力」、「実行する力」、「チームワーク
力(協調性)」、「コミュニケーション力」などの
人間力を育成する

のでは。

で、場違いな私が何をしゃべるのか

① 教育って何だ。

素人の勝手な、浅はかな意見

② 本学の教育哲学？

開設に携わったファウンダー達の言葉

③ 学修環境整備

ハードとソフト



①教育って何だ？

教育とは真実を直接伝えるものではなく、既存の
知識の誤りを自らに発見させるものである。真実
に至るには自分で考えなければならない。

自分で考える力を付けるための手法：対話(弁証法)

ソクラテス

教師が人々に基礎的な知識を与えたうえで、その
習得を計画的かつ段階的に深めていくのが教育。

基礎となる教科は、「読むこと、書くこと、算術」

プラトン

ソクラテス・プラトンの時代から
何ら変わりはないですよね。

もう一つ。

「考え方、原則を教えて、若者の雑多な知識を社会で生きる人の力に変えるのが大学教育：The Aims of Education (1927)」

アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド
イギリス人數学者・哲學者

これまた、何ら変わりはない。

どうして今、
「主体的な学び」
なのか。

？？？？？？

②高知工科大学の教育哲学？

その①

「考え方、原則を教えて、若者の雑多な知識を社会で生きる人の力に変えるのが大学教育」


The power of a man
人間力

末松安晴先生
(初代学長)

末松先生いわく

「学力や知識に偏重した教育ではなく、人間力を育成する為の教育が必要」

先生のお言葉

「行って考え、考えて行う」

その②

『人が育つ大学』

岡村甫理事長
(2代目学長)
※KUTファウンダーの1人

岡村理事長いわく

人を育てるなんておこがましい。
我々は人を育てることなんてできない。
ただ、人が育つための手助け（環境の整備）
はできる。
その環境で生活することで、人は勝手に育つ。
学生だけでなく、教職員、本学に関わる全ての
人が育つ大学をつくる。

この2人の教育哲学のもとで、
大学のシステムを設計。

しているみたい。

「主体的に学んでもらう」
最初から、勝手に育ってもらう
ためのシステムが組み込まれた
大学。

「人が育つ大学」

といつてもいいかも。

その目線で高知工科大学を紹介

③学習環境整備



「主体的な学びを支える仕組み」を
高知工科大学流に言うと

『人が育つ』
『人が育つ』しかけ！！

実は、私も今年までは、この目線で
本学を見ていませんでした。
しかし、

そうしてみると・・・
なるほど、納得。

人が育つための手助けね。
(環境の整備)

『人が育つ』大学のしかけ①

建物：ハード

【コンセプト】 人と人が交わる場(オープン設計)

刺激・モチベーション

教育研究棟
1F: 研究室・講義室
4F: 教員室・コモンスペース
コリドール



教育研究棟 1 F





教育研究棟 4 F



コモンスペース

“人が育つ”建物の工夫

学生と教員が日常的に出会うように設計された教育研究棟。その4階にあるコモンスペースは、誰でも雑談からミニ授業まで自由に使えるコミュニケーションスペースです。その周辺にガラス張りの教員室があり、先生の研究姿勢も丸見えです。

『人が育つ』大学のしかけ②

制度（システム）：ソフト①

【コンセプト】長所を伸ばす

学ぶ意欲を支え続ける

クオーター制・全科目選択制

早期卒業制度

教育講師制度・オフィスアワー

クオーター制

“短期集中”で学ぶ

1年を四期に分け、8週間を一期とする制度。一週間に1つの科目が2コマ進み、技術や知識を確実に身につけながら短期間でステップアップできるので、興味のある学問領域に、早く、深く、触れることができます。

全科目選択制（必修科目なし）

将来の目標に向け自由に学ぶ

必修科目はなく、自分が興味を持った科目を将来の目標に応じて自由に選択。他学群・学部の科目も選択可能。科目履修に際しては、指導教員が丁寧にアドバイスします。

教育講師制度

入学から就職までサポート

社会・企業経験豊かな教育講師が4年間継続して学生を指導・支援します。学生のやる気を引き出し、人間力を高める高知工科大学独自の制度。何でも相談に乗ってもらえる心強い存在です。

『人が育つ』大学のしかけ②

制度（システム）：ソフト②

【コンセプト】その気にさせる

学ぶ意欲を引き出す

学会発表・留学

奨学金・表彰・特待生

学生による学会発表

世界レベルの研究者・技術者へ

年間200名もの学生が国内外の学会に参加し、研究発表を行っています。その分野の専門家に対して発表するので準備や練習が大変ですが、そこで得た経験は、その後の研究や就職活動に大きな自信を与えます。

『人が育つ』大学のしかけ②

制度（システム）：ソフト③

【コンセプト】学びの習慣づけ

主体的な学びへの導入
：アクティブラーニング

クリックカード・小テスト・レポート・宿題
スタディスキルズ・少人数セミナー

スタディスキルズ

社会・企業経験豊かな人生の大先輩から
学び方を学ぶ

徹底した少人数指導で、実社会で必要な「論理的に、正確に、読む・書く・話す力」を高め、学ぶ意欲と目的意識を養う、KUT独自の科目「スタディスキルズ」。高校と大学との「学び方」の違いを認識し、そのギャップを埋めるための架け橋となる導入科目です。授業では課題や演習を通じ、レポートの書き方から、プレゼンテーション力、問題点の見つけ方、解決法までを学べるよう、細やかにサポートしていきます。教育講師が、それぞれのキャリアを活かし、専門分野に関連したテーマについて、演習中心の授業を行います。

確かに・・・

「人が育つ大学」。
この哲学のもとで、
大学のシステムを設計していた。

「主体的に学んでもらう」
最初から、勝手に育ってもらう
ためのシステムが組み込まれた
大学であった。
「人が育つ大学」

私がそうであったように、
そういう目線で、それぞれの大学を見てみると、
「主体的な学びを支える仕組み」
は、すでにあるって大学、
結構あるのでは？

ソクラテス・プラトンの時代から
何ら変わりはないんだから。

大切なのは、きちんとした哲学
のもとで、それぞれの仕組みを
有しているということ。

ちなみに・・・、
本学の成果はというと？

ふくだの本音

成果はまずまず(かな?)。

- 就職率・質(途切れていない企業とのパイプ)
- 学生との距離感・学生満足度
- 出席率....etc.

でも・・・

ちょっと手をかけすぎの感あり。

どこまでが本当に必要な部分なのか・・・課題はある。

最後に

高知工科大学の理念を紹介

大学のあるべき姿を常に追求し、
世界一流の大学を目指す。



KUT
Kochi University of Technology